
赤き月の鷹【完結】ガンダムSEED DESTINY再構成

かーき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

赤き月の鷹【完結】ガンダムSEED DESTINY再構成

【Nコード】

N85260

【作者名】

かーき

【あらすじ】

赤き月の鷹【完結】ガンダムSEED DESTINY再構成です。

ルナマリア主人公

*この作品は以前2chに投稿した物です。
arcadiaさんにも同時投稿させていただいております。

破られた平和

あれは二年前の事だった。

ザフトの人が突然家を訪れて来た。

母が相手をするのを、あたしは隠れてみていた。

「奥さま、この度は……」

「いいのよ。わかってているわ。覚悟はしていました。あの人が戦死したのでしょう?」

「……はい。ブライアン・ホーク隊長は、戦死されました。」

「どんな死に方だったの? あの人の事だから、勇敢に戦ったでしょうね」

「は! 隊長はそれは勇敢に戦われたそうです」

「それで? はつきり言って頂戴!」

「……酸欠です」

「……酸欠ですって?」

「動力部を撃ち抜かれ、宇宙を漂われていたのですが救援が間に合わず……」

「……そんな死に方、苦しんだでしょうね。運がなかったのね。可哀想に……」

「……」

「まだ、何か?」

「……わざと、だそうです」

「え?」

「わざとコクピットを外したのだそうです。ご主人を撃つたのは、ラクス・クラインに奪われたフリーダムだったそうです。『精密射撃によりコクピットへの直撃を避け、行動力のみを奪う。『命の奪い合い』という戦場の理を超越したその行動は、あたかも人の邪心のみを切り裂く魔法物語上の剣のようだった』とクライン派が宣伝

かましい、あの！」

「ひどい！わざとコクピットを外すなんて！ 混乱してる戦場で救援なんかすぐ来るわけじゃないじゃない！ 誰だってわかるじゃない！ なぶり殺しじゃない！ これじゃあ！ ああああー！」

母は号泣していた。

あたしの頬にも涙が流れていた。とても強く、ちよつと乱暴なところもあったけど、あたしたち家族には優しくかった父が死んだと言う、実感なんてまるでないのに涙だけが。

その日、あたしはザフトに入る事を決意した。

一年半に渡った地球、プラント間の戦いは、ヤキン・ドゥーエ宙域戦を以てようやくの集結をみた。やがて双方の合意の下、かつての悲劇の地、ユニウスセブンにおいて締結された条約は、今後の相互理解努力と平和とを誓い、世界は再び安定を取り戻そうと歩み始めていた。

「はあ、急がないと帰る時間になっちゃうね、ヴィーノ」
「しかしやっぱリミネルバが就役して配備ってなるとき、色々買い込みたくなるよな」

「そうね、しばらく缶詰状態だものね」

向こうから話し声が聞こえてきた。

「……じゃねえの？ お前もバカをやれよ、バカをさ！」
「ああ、やってやらあ」

ドスン！

え？建物の角を曲がって大通りへ出たとたん、水色の髪の少年がくるくる回りながらぶつかってきた。

その少年と一緒に倒れこみ、後ろから抱えられる形になったけど……

「……ちよーと！ いつまであたしの胸触ってんのよー！」

頬をひっぱたくと、そいつはそそくさと去って行った。

「いいなあ、あいつ。ラッキースケベ」

「なんか言った？ヴィーノ？」

「いいえ、なんにも！」

基地へ戻ると式典の準備でみんな忙しそうにしてる。

『軍楽隊最終リハーサルは、一四〇〇より第三ヘリポートにて行う』

「違う違う！ ヤザック隊のジンは全て式典用装備だ！」「マツカランのガスウートか！ 早く移動させる！」「ライフルの整備、しつかりやつとけよ！ 明日になってからじゃ遅いんだからな！」

『第二整備班は第六ハンガーへ集合せよ』

「うわっ！」

「あつ！あぶなかったあ。MSに踏まれるところだったじゃない、ヴィーノ。運転気をつけてね。はあ……なんかもうごっちゃごちゃね」

「仕方ないよ。こんなの久しぶりってか、初めての奴も多いんだし。俺達みたいに。でもこれで、ミネルバもいよいよ就役だ。配備は噂通り月軌道なのかな？」

「かもね。近くから見る月ってきれいだろうな」

……

「でもさー。いよいよ就役だぜ！　なんかわくわくするよ」
「ふふ、子供みたい。シンったら。でもほんと。遠足の前の日みたい」

『ウーウー！　ウーウー！　ウーウー！　ウーウー！　ウーウー！
ウーウー！』

「なに？警報！？」

ミネルバに戻ってシンとぶらついていたらいきなり警報が鳴り出した！

『コンディションレッド発令！コンディションレッド発令！パイロットはMSに搭乗せよ！』

「急ごうー！」

「うんー！」

『第六ハンガーの新型機3機が強奪されたそうなの！　なんとかして
も捕獲して頂戴！』

艦長のタリアさんが言ってきた。

「努力します！」

『グフイグナイテッド、発進スタンバイ。パイロットはコクピット
へ。お姉ちゃん、頑張って！　右カタパルトオンライン。気密シヤ

ツターを閉鎖します。発進区画、非常要員は待機して下さい。発進
シークエンスを開始します。ハッチ開放。カタパルト推力正常。進
路クリアー。グフイグナイテッド、発進、どうぞ！」

あたしは空中に飛び出した！

空中から強奪された新型機を探す。

……！黒いMS　ガイアが緑のザクと遣り合っている！その後ろ
に、あれは　カオス！　挟み撃ちにされる！
あぶない！

あたしはザクとカオスの間に飛び込むとビームソードを抜き放つ！
カオスのビームサーベルをがっしり受け止める！

「なんでこんな事を！　また戦争がしたいの？　あんたたちは！」

初陣

「はあああー！ー！」

右手のビームソードはカオスのビームサーベルを受け止めたまま、左腕のスレイヤーウィップを解き放つ！ 高周波パルスが発生して赤く発色しながらカオスへ向かう！ たとえカオスがVPS装甲だとしても！ 高周波パルスによってパイロットにダメージを与えることが出来る！

ちっ、カオスは機動兵装ポッドに付いた大型ブースターに物を言わせ、一気に距離を取る。

困った！ あたしの距離じゃない！

カオスは建物の瓦礫に隠れながらビームライフルを撃ってくる。あたしもドラウプニル4連装ビームガンで牽制する！

ガイアの方は！？ ザクが押されてる！

ええい！ シールドを構えカオスに突撃する！ またカオスに距離を取られるけど！ すぐに反転し一気にガイアに突撃する！

「ええい！」

ザクとやり合っているガイアを狙いビームソードを振り下ろす！

ガイアはとっさにシールドで受け止めたけどビームソード”テンペスト”はシールドを切り裂いた！ ガイアは盾を捨てると空中に飛び上がる！ ビームガンで牽制！

「お待たせ！ ルナ！ カオスは任せろ！」

「任せた！」

よっしゃ、シンが来た！これでガイアに集中できる！ まだアビスもいるはずだけど、その位は他のMS隊に期待してもいいはず！

『ルナ！命令は捕獲だぞ！解ってるんだろうな！あれは我が軍の…』

副長がうるさい！

「可能なら捕獲します！ 努力はしてます！」

ガイアはMS形態になり建物の瓦礫で跳躍してビームを撃ちながら上から襲ってくる！

ビームをテンペストで切り払いながらあたしもダツシュ！ ガイアはMS形態に変わってビームサーベルを打ち付けてくる！ テンペストとぶつかり合い空気がスパーク！

コロニーの大地に衝撃が走る。何？ まさか外からの攻撃！？

ガイアはMA形態での一撃離脱に専念したようだ。巧みにあたしが振り下ろすテンペストに背中ウイング前面に展開されるグリフォンのビームブレードを当ててくる。

でも、いいかげん慣れるわよ！

「もらった！」

あたしはジャンプしながら地上のガイアのウイングを切り裂く！

！ 空中からようやく現れたアビスが胸部のカリドウス複相ビーム砲を放ってくる！ あたしは危うく避ける！

「くそう！ 邪魔を！」

デインが何機か来たけど、すぐにアビスの過剰と思える程のビーム兵器で落とされて行く。

今度はあたしが劣勢になった。アビスのビーム砲を避けながらガイアに対処しなければいけない！ あたしは懸命にガイアに密着しようとする！

「待たせたな、ルナ」

この冷静な声は レイ！

白く塗られたザクファントムに乗ってレイが現れた！レイがアビスを牽制射撃してくれる！

レイが現れた事で戦場は空中に移った！ ガイアは一層激しくビームを放ちながら攻撃してくるけど地上ほど翻弄されはしないわ！

！ 突然ガイアが空中で棒立ちになった！ なんだかわからないけどチャーンス！

あたしはガイアに突撃し、スレイヤーウィップを放った！ ガイアは地上へ落ちていった！

それを見るとカオスとアビスはビームで牽制しながら撤退を図る！

距離を取られるとだめだ。あたしはシンとレイがビールライフルで攻撃する合間にも必死でカオスとアビスに近づこうとするのだけど、カオスが巧みに機動兵装ポッドを操って牽制してくる。

アビスに追いついた！

「覚悟しなさい！」

アビスはビームランスを繰り出す！ あたしもテンペストを取り出す！

「槍なんて取り回しにくい武器なんか！」

テンペストは見事にビームランスの柄を叩き切った！
！ ました！ ビーム砲を一斉射撃され距離が開く。
アビスは反転してコロニー外壁へ集中射撃！

「あ、壁に穴が！」

カオスとアビスは吸い出されるようにコロニーの外へ出て行ってしまった。

シンが追って外へ出る！

「シン、一旦引くんだ！」

あたしとレイも外へ出る。

カオスとアビスは！？ 周囲を探ってみても見つからない。

シンが攻撃を受けてる！ まるで全方位からのような。そんな
莫迦な！

レイがいきなりビームライフルを発砲する！

「何をしている！ ボーっとしていたらただの的だ！ この敵は普通とは違う！」

あたしにもようやく見えた！　小さな、カオスの機動兵装ポッドの
ような物がいくつかシンの周囲を動いている。

近くにMSはいないと言うことは、前大戦時の初期、ザフトのMS
にまがりなりにも対抗して見せたと言うメビウスゼロのガンバレル
の新型か？

遠距離には非力だけど、あたしだって！　ドラウプニル4連装ビ
ムガンを両手から撃つ！

やった！　ビームガンを避けたガンバレル一基を、レイが見事に撃
ち落した！

！　帰還信号が上がる！　ミネルバが出てきたの！？

「帰還信号！？　なんで！」

「命令だ」

「命令よ、シン。一旦帰りましょう」

オーブの姫

あたしたちはミネルバに帰還した。

「ルナ、大丈夫か？」

「ありがとう、ヴィーノ。さすがに疲れたわあ。グフはやっぱり砲戦用MSと組まないのだめね」

「お疲れさん、とりあえず休んできなよ」

「ありがとう、ヨウラン。あれ？ あれはガイア？ なんでここにあるの？」

「それがさあ、とりあえず安全な場所について事で運び込まれたんだよ。それに、驚くなよ？ なんとデュランダル議長とオーブのアス八代表まで、安全だつてんでこの船に乗り込んできちまったんだ！」

「えー！ー！？ ！ 何！？」

あたしが驚くのと同時に、艦が揺れた。

「何だ！」

「被弾したあ！？」

しばらく経って艦内放送があつた。

『全艦に通達する。本艦は此より更なるボギーワンの追撃戦を開始する。突然の状況から思いもかけぬ初陣となったが、これは非常に重大な任務である。各員、日頃の訓練の成果を存分に発揮できるように努めよ』

「やれやれ、とんだ事になったわね。じゃあ、エイブスさんたち、MSの整備お願いね」

「任せとけ！ あ、そついや報告するの忘れてたな」

「え、何を？」

「いやー、オーブのアス八代表が乗り込んでるって事をさ」

そつ言うとエイブスさんは艦内通話装置でブリッジを呼び出した。

「艦長！」

『どうしたの？』

「戦闘中のこともありご報告が遅れました。本艦発進時に格納庫にてザクに搭乗した2名の民間人を発見。これを拘束したところ2名は……オーブ連合首長国代表カガリ・ユラ・アス八とその随員と名乗り、デュランダル議長への面会を希望致しました」

『オーブの……』

「僭越ながら独断で、今士官室でお休みいただいておりますが……」

「ルナ、ここはいいから休んできなよ」

「ルナは今は休むのが仕事だからな、しっかり休んどけよ」

「ありがとう。じゃー！」

……

あたしは、パイロットスーツを脱いでシャワーを浴びる。戦闘で汗ばんだ体に熱い湯が心地いい。ひとしきり汗を洗い流すと、熱い湯と冷水を交互に浴び、肌を引き締めて終わる。

食堂で軽食を取ると30分ばかり仮眠する。

……

うーん！ 目覚めて伸びをする。のどが渴いたあ。

あたしはドリンクを手にモバイルスーツデッキへ向かった。

「あ、シン！ 聞いた？ この船にデュランダル議長とオーブのアス八代表が乗ってるんだって！」

「ああ、知ってる。議長の方はさつきレイが案内してたな」

「アス八代表ってどんな人だろうね。前大戦時の英雄って言われてるけど」

「知るかよ！」

「あ、ごめん、シン……」

「いや……」

ヨウランとシンとMSの設定を調整していると、上部デッキに議長が入ってきた！ じゃあ、あの金髪の女の子がアス八代表？ 若いな！。

「だが！ ではこのたびの事はどうお考えになる！」

何？ 突然アス八代表？ の声が大きくなりモバイルスーツデッキへ響く。みんなが議長たちを注目する。

「あのたった3機の新型モバイルスーツのために、貴国が被ったあの被害のことは！？」

「そもそも何故必要なのだ！ そんなものが今更！」

「我々は誓ったはずだ！ もう悲劇は繰り返さない！ 互いに手を取って歩む道を選ぶと！」

なんなのこのお姫様？ もう我慢できない。言うべきだ！ ここで働いているみんなのためにも！

「さすが綺麗事はアスハの……」お話の途中申し訳ございませんがお聞きします!」

「ルナ!」

「何だ ! 今いいところなのに!」

「あなたの国の理念は『他国の争いに介入せず』なのですよね?

ならば、何故約二年前にはあれほどの戦力を保持していらしたのですか? それに今も軍備を充実させていらっしゃる。なぜザフトは軍備を整えてはいけないのでしょうか?」

「あれは自衛目的のための軍備だ! それに、強すぎる力は争いを呼ぶ!」

「ザフトの軍備も自衛目的です! まさか攻撃目的とでも言いますか!? それに、なんですか? 強すぎると言いますが誰がそれを決める権利があるのですか? なぜプラントの軍備に対してプラント市民でもないあなたが言うのですか? オープの軍備は強すぎる力だから減らせとあたしが言ったらあなたはそうしますか!? あなたのおっしゃる事は、プラントを守ろうと命を懸けて働いている皆に対しての侮辱です!」

言っちゃった……

伝説の戦士

『敵艦捕捉、距離8000、コンディションレッド発令。パイロットは搭乗機にて待機せよ』

モビルスーツデッキに満ちた沈黙を艦内放送が破る！

「最終チェック急げ！始まるぞ！」

「ルナ！……申し訳ありません議長！この処分は後ほど必ず！」

あたしを掴もうとするレイを振り切ってあたしはパイロットスーツを着に行った。あたしは間違った事は言っていない！

……

「シン・アスカ、インパルス、行きます！」

「レイ・ザ・バレル、ザクファントム、出る！」

シンとレイが先行して、その両脇をショーンとデイルのゲイツRが固めて行く。

みんな無事だといいいけど。

自分が何もしていないでいると、コクピットで待機していると焦りが襲う。

ボギーワンをロスト、そしてまた捕らえたと言う報告が入った！

艦が揺れる！ 攻撃されてるの！？

その時間は長く感じた。

『グフイグナイテッド、発進スタンバイ。カタパルトが使えませ
ん！ 歩いてでも出てください！ 敵、MS2機、MA1機を確認
！ 気をつけて！』

「了解！ ルナマリア・ホーク、グフイグナイテッド、出るわよ！」
ミネルバのみんな、やらせない！

……

デブリの間を縫って行く……！ あの全方位からの攻撃！
あのメビウスゼロの新型か！？

「ええい！」

シールドを構え前のダガーLに突進！ 密着したら、撃てないでし
よう！？ ガンバレルさん！

まず一機！ 相手が砲撃する間も与えず、スレイヤーウィップでダ
ガーLを真つ二つにする！

しよせん砲戦使用のダガーなんか！
あと一機！ あんたには盾になってもらうわ！

右側のダガーLのバックパックをテンペストを引き抜きながら削ぎ
落とす！

安心してね！ 爆発しないようにうまくやったから！ 動揺する敵
機の手も切り飛ばす！

こいつの影からドラウプニル4連装ビームガンでガンバレルを弾幕で包み込む様に撃つ！

そうそう、その動くルートしかないよねえ！

一気にダツシユスレイヤーウィップを叩きつける！ ガンバレル一基爆散！

すぐさまダガーLのそばに戻る。

ほーらあぶない、ガンバレルさん。気をつけないとダガーL撃つちやうよ？

！ とつさに避ける！ あたしが盾にしていたダガーLが爆散した。

新型メビウスゼロはガンバレルを本体に戻すと撤退して行った。

間違いない。あのパイロット、あたしじゃなくてダガーLを狙った

ミネルバの方を見ると、ボギーワンにタンホイザーを撃つ光景が見えた。

ボギーワンは撤退していく。

よかった。危機は脱したんだ。

……

ミネルバの周囲をぐるりと回る。ひどい有様だ。

「おーい！ 無事かー！」

「あ、シヨーン、ゲイル！」

「レイが、最初に捕らえてたボギーワンがデコイだって気付いてね。先に返されたのよ」

「遅いわよー。でも、手ひどくやられたけど、ミネルバはなんとか

無事だったわ」

「よかった！ 帰るところが無くなるんじゃないかと焦ったよ」

あたしたちはミネルバに帰艦した。

そのうちシンとレイも帰ってきた。無事だったんだ。よかった。

「あ！ お姉ちゃん、レイ、シン、みんな！ お疲れ様。大丈夫？」

「疲れたけどなんとかな」

「うん、大丈夫よ。怪我もしなかったし」

「よかった。そうそう。飛び切りの二ユースがあるの！」

「えー！アス八代表の随員が、あのアスラン・ザラ！？」

話しながら、あたしたちは休憩室に向かった。

「でもあ、ほんとに名前まで変えなきゃなんないもんなの？ だ

つてあの人前は……」

「何言つてのよあんたは。いくら昔……」

「あーうう……」

休憩室には、噂のアスラン・ザラがいた。

「へえー、ちようど貴方の話をしていたところでした、アスラン・ザラ。まさかと言うかやっぱりと言うか、伝説のエースにこんなところでお会いできるなんて光栄です」

「……俺はそんなものじゃない。俺はアレックスだよ」

「だからもうモビルスーツにも乗らない？」

「……」

「よせよルナ。オーブなんか居るヤツに……何も解ってないんだか
ら」

「んあ？」

「では、失礼します」

「あ、レイちよっと。でも、艦の危機を救って下さったそう。ありがとうございます」

「いや、まあ、うん」

あたしは、敬礼すると休憩室を出た。なんだか彼、一人になりたそうな雰囲気だったから。

……

ユニウスセブンが動いている、と言う情報が入ったのは、ミネルバの修理も、もうすぐ終わるかと言う時だった……

アスラン・ザラ

「ふーん。けど何であれが？」

「隕石でも当たったか、何かの影響で軌道がずれたか」

「地球への衝突コースだつて本当なのか？」

「うん、シン。バートさんがそうだつて」

「はあく、アーモリーでは強奪騒ぎだし、それもまだ片づいてないのに今度はこれ？どうなっちゃってんの？」

「で？ 今度はそのユニウス7をどうすればいいの？」

「ええ？」

「えっ？ああ……何できるんだろ」

「砕くしかない」

レイが、決然とした声で言った

「砕くつて？」

「あれを？」

「軌道の変更など不可能だ。衝突を回避したいのなら、砕くしかない」

「でもデカイぜあれ？ほぼ半分くらいに割れてるって言っても最長部は8キロは……」

「そんなもんどつやって砕くの？」

「それにあそこにはまだ死んだ人達の遺体もたくさん……」

「でもメイリン、そうね、砕くしかないかもしれない。衝突すれば地球は壊滅するわ。そうなれば何も残らないわよ。そこに生きるものも」

「……」

「地球、滅亡……」

「だな。」

「そんな……」

「はあー、でもま、それもしょうがないっちゃあしょうがないかあ？ 不可抗力だろう。けど変なゴタゴタも綺麗に無くなって、案外楽かも。俺達プラントには……」

「よくそんなことが言えるな！ お前達は！」

オーブのお姫様が飛び込んできた。

「しょうがないだと！？ 案外楽だと！？ これがどんな事態か、地球がどうなるか、どれだけの人間が死ぬことになるか、ほんとに解って言うてるのかッ！？ お前達はッ！」

「すいません」

「くッ…やはりそういう考えなのか、お前達ザフトは！ あれだけの戦争をして、あれだけの想いをして、やっとデュランダル議長の施政の下で変わったんじゃないのかッ！！」

「よせよカガリ」

カチンと来た。なんなの？このお姫様は。モビルスーツデッキのことと言い！

「失礼ながら、よろしいでしょうか？」

「なんだ！？」

「ヨウランの発言が不適切であったことは謝罪いたします。しかし彼も場を和ませようとしてのことです。地球無しにプラントが成り立たない事など、皆わかっています。それを考慮せず、いきなり仲間の会話にしゃしゃり出て頭ごなしに怒鳴りつける、しかも他国の人間がされるのはどうかと思えます」

「な！？ だけど私は！！！」

「それから、『やはりそういう考えなのか、お前達ザフトは！』と言われましたね。『やっと変わったんじゃないのか』とも！お言葉ですが、宣戦布告されたのも、プラントに核を撃たれて民間人を虐殺されたのもプラントが先ですが！ N J C の技術が漏洩してから、すぐさま、また核攻撃されましたが！ 私達こそ聞きたい！『地球に住む人々は変わったのか？』と！ ザフトが地球などどうでもよかったのなら、前大戦時に、部下の反乱にも合わずにザラ議長は地球を滅ぼしていたでしょう！ とにかくあなたがザフトに對しどう言う考えを持っているかはよく分かりました。このことは是非議長にもお伝えしたく思います」

「お前えッ」

「いい加減にしろ！カガリ！」

「くッ……」

「御自分の発言には責任を持ってください。それでは、失礼します」

「あ、待ってよ、お姉ちゃん」

後ろでは、まだシンがオーブのお姫様に何か言っていて、レイがたしなめてるようだった。

「でも、あれで代表だなんて、笑っちゃうわね」

「お姉ちゃん……」

「あれじゃただの……メイリンに当たってもしょうがないか。ちょっとね、期待してたのよ。前大戦の英雄って言うから。ああ、この人は英雄だって、思わせてくれるならよかった。ずるがしい狐みたいな食えない人でもよかった。でもあれじゃ、ただの、馬鹿じゃない」

お父さん……あなたを殺したキラ・ヤマトがどうか只者ではありませんように。ただの馬鹿者なら、あたしは殺意を止められないかもしれない。

あとでアスランにエレベーターの前で出会った。

「あら、大丈夫ですか、お姫様は」

声に険が混じってしまうのを自覚する。

「ルナマリアか。すまない。先ほどの彼女の発言は失言だった」

「いえ。あなたに謝られても仕方ありません。むしろ、彼女のそばにいるあなたに対しても非常に失礼な言葉でしょう？ アスランさん。まさか『そういう考え』を持っていた訳じゃないんでしょう？

前大戦時」

「アスランでいいよ。どうか。母がユニウスセブンで亡くなった時は、とても悲しかった。ナチュラルすべてを敵だと思っていたよ。コペルニクスでのオーブ国民のコーデイネーターの昔なじみがプラントに付かなかった時、ひどい裏切りだと感じた。さすがに地球を滅ぼしたいとまでは思わなかったがね」

「でも、アスランは防いでくれたじゃないですか。地球が滅びるのを。自分の機体を自爆させる危険冒してまで」

「うん、まあ。ルナマリアは……地球は好きかい？」

「好きですよ。プラントが地球無しにやっていけないのとは関係なく。人類の発祥の地じゃないですか。地球の大自然ってやつにも憧れるし。あたし、シーゲル・クラインが唱えた『コーデイネーターはナチュラルの中に帰っていくべきだ』って意見に賛成なんですよ。いつか地球に住んでみたい」

「そうか、その時はぜひオーブへ来るといい。ナチュラルとコーデイネーターが共存してるし、海もきれいないい国だ」

「あは、その時は案内お願いしますね」

「ああ。きつと。そうだ、俺はこれからモビルスーツに乗って破砕作業の手伝いをすることにした！ よろしく頼む！」

「アスランが？ それは心強いです！ じゃあ、あとで！」

あたしはアスランと別れてモビルスーツデッキへ向かった。

『モビルスーツ発進3分前。各パイロットは搭乗機にて待機せよ。繰り返す、発進3分前。各パイロットは搭乗機にて待機せよ』

「でも、粉碎作業の支援でいったって何すればいいのよ」

「それは……」

「ん？ アスランさんだ」

「ガイアで出るんだってさ。作業支援なら一機でも多い方がいいって」

「さつき聞いたわ。なにはともあれ、数が多いのは心強いよね。ミネルバ、定数パイロット積んでないんだし」

『発進停止。状況変化。ユニウスセブンにてジュール隊がアンノウと交戦中』

「え！？」

『各機、対モビルスーツ戦闘用に装備を変更して下さい』

あたしはアスランに呼びかけた。

「状況が変わりましたね。戦闘をして大丈夫なんですか？」

「非常時だろう。議長権限の特例って事で許可もらうさ」

「じゃあ、援護よろしくお願いします。この機体、接近戦用なんで」
「わかった！」

「ルナマリア・ホーク、グフ、出るわよ！」

悲劇の地で

あたしたちがユニウスセブンに付くと、工作隊は何者かの攻撃を受けていた！

「なんだ？カオス、アビス？」

「アーモリーワンで強奪された機体か！？」

「そうです！ アスラン！」

「チィ！あいつら！」

「あの二機、今日こそ！」

「ルナマリア、目的は戦闘じゃないぞ！」

「解ってます。けど撃ってくるんだもの。あれをやらなきゃ作業もできないでしょ？」

「くッ……」

「じゃあ、シン、レイ！ カオスとアビスは頼んだわよ！」

「ルナマリア、君は？」

「あたしたちは工作隊を攻撃しているジンを叩きます！ ショーン、ゲイル、両脇お願い！」

「了解！」

「あなたたち！ 無益なことはやめなさい！」

一応言ってみただけど聞く相手ではなかった。

問答無用で撃ってくる！

是非もなしか！ ショーンとゲイルの援護の下ドラウプニルを連射して突っ込む！

近距離からの連射に耐え切れずまず一機撃破！

スレイヤーウィップを叩きつける！ 相手は真っ二つに裂ける！

二機目撃破！

「くっ、ルナ！ こいつらそっちに行こうとしてるみたいだ！ 気をつける！」

「わかったわ！ シン！」

それなら！ こちらの利点は 相手の性能を知っていること！
カオスは機動兵装ポッドで攪乱してくる！

でも、それじゃあ本体の機動力落ちるわよね！

機動兵装ポッドの相手はアスランとショーン、ゲイルに任せ、あたしは一気に本体へ突っ込む！

カオスはM A形態になりカリドウス改複相ビーム砲を放ってくる！

そんな大技！ 避けてみせる！

ドラウプニル4連装ビームガンを撃ちながらあたしはカオスに接近する！

！ カオスはM S形態に戻ると蹴りを放ってくる！ あぶないあぶない、そう言えばビームクロウなんて武器もあったわね！ あたしはテンペストを抜くとつま先を切り飛ばす！

もらった！ スレイヤーウィップを両腕から放つ！

だが、敵は一瞬早く機動兵装ポッドを戻し、一基をスレイヤーウィップの犠牲にして本体を救った！

機動兵装ポッドに詰まれたミサイルが爆散する隙を突いて、カオスは撤退して行った。

後は、アビス！

「みんな、散開して離れて！ 一対一にさせて！」

ひたすら本体を追えばいいアビスの方がカオスより！

「この泥棒がー！ー！」

いくら多数のビーム砲を装備してしようと所詮一点からの攻撃なのよ！

相手があたし一機だけで残念ね！ 無駄！ 無駄！ 無駄！

あたしのドラウプニル4連装ビームガンも宇宙で射程が延びる！ばら撒いて隙を作ると一気にアビス本体へ突進！

アビスは思わず両肩のシールドで防ぐ！

そんな事していると攻撃できないでしょう？ それが攻防一体の盾のあなたの弱点よ！

テンペスト！ 確実に仕留めた！

と思ったら、アビスは絶妙に身をかわし、片方のシールドを切り飛ばされただけで撤退して行った。

「すごい……これがわざわざ異例にグフを与えられたパイロットの力かよ……」

「シン！何をしている！作業はまだ終わってないんだぞ！」

「わかつてる！」

あたしたちが戦っている間に、メテオブレイカーは一基、また一基と爆破作業に成功して行った。

「だがまだまだだ！ もつと細かく砕かないと！」

「アスラン！？」

「貴様あ！こんなところで何をやっている！」

「そんなことはどうでもいい！今は作業を急ぐんだ！」

「あ、ああ！」

「解っている！」

「相変わらずだなイザーク」

「責様もだ！」

「……やれやれ」

あれは……前大戦時のアスランの仲間！

一気に明るくなる雰囲気。でも、まだ残ったジンが攻撃を仕掛けてくる！

射撃をかいくぐり、近距離からドラウプニルを叩き込む！

相手のビームをテンペストで弾き、そのまま相手を一閃する！

これで終わりかしら？

……？ 帰艦命令？ そうか、高度か！

「ん？ あ、アスラン！」

「え？」

「く……」

「何をやってるんです！ 帰還命令が出たでしょう。通信も入ったはずだ！」

「ああ、解ってる。君たちは早く戻れ」

「アスラン、一緒に吹っ飛ばされますよ？ いいんですか？」

「ミネルバの艦主砲と言っても外からの攻撃では確実とは言えない。これだけでも……」

「……貴方みたいな人がなんでオーブになんか……」

「ん？」

「うおおおー！」

「これ以上はやらせん！」

「こいつらまだ！」

「ええい！ ああ！メテオブレイカーが！」

「我が娘のこの墓標、落として焼かねば世界は変わらぬ！」

「娘……？」

「なにを！ そんな事で変わるならば苦勞はしないわよ！」

あたしは前から来るジンの重斬刀をかわしテンペストで真つ二つにすると、上部を後ろから来るジンハイマニューバ2型に投げつける！

「ぐあ……！ 此処で無惨に散った命の嘆き忘れ、討った者等と何故偽りの世界で笑うか！ 貴様等は！ 軟弱なクラインの後継者どもに騙されて、ザフトは変わってしまった！ 何故気付かぬかッ！ 我等コーディネーターにとってパトリック・ザラの執った道こそが唯一正しきものと！」

「死んだ人は泣かないわ、苦しめない、怒りもしない。そして笑わない喜びもしない！ 私の父がそうであるように、幾ら望もうが願おうが、二度と笑顔を向けてはくれないのよ！ それを報復の大義などに使うな！」

「確かに核で家族を奪われた人間が地球の人間を許せないのは分かる！ 俺も母親を奪われたときは辛かった。父、パトリック・ザラはそのことで変わってしまった……でも、個人の憎しみで平和を拒否してこんなもの落として泣く人間を増やすのは間違ってる！」

「そうだとて、赦せるものか！！ ナチュラルどもを！」

「赦せなくてもいい、さっさと降伏しなさい、それがプラントを守る事に繋がる！」

「妻も娘も逝き！友は貴様らが撃った！もはや私を守るものなどないわ！」

「ならば……死ね！」

そう言うとアスランはM A形態になってビームを撃ちながら駆ける！ あたしはその上空をテンペストを構えて突撃する！

「ぬおおおお！」

ジンはビームカービンを撃ち尽くすとシールドも捨てて斬機刀を構える。

そんなもの！

あたしのテンペストが斬機刀を切り飛ばし、ガイアのビームブレイドは見事にジンハイマニューバ2型を切り裂いた。

「大丈夫ですか？ アスラン」

「ああ……すまない、ルナマリア。破砕作業に戻るぞ」

メテオブレイカーは無事に地中に突入して行った。

「さあ、戻るわよ！」

！

「お前だけは——！」

まだジンがいたの！？

「アスラン！」

ガイアは隙を付かれて、ジンに足を掴まれて地球に落下して行く！

「くっ」

あたしも急降下してテンペストでジンを切り飛ばす！

「突入角度調整。排熱システムオールグリーン。自動姿勢制御システムオン。ECSニユートラルへ。……アスラン大丈夫かな？大丈夫よね？なんたってセカンドシリーズだもの」

あたしは無事に大気圏突入に成功した。あの人は、アスランは！？

！いた！

「アスラン！聞こえて！？無事ですか！？ガイアはスラスタの能力が足りないわ！一緒に！」

「莫迦！君だけでも戻れ！グフのスラスタでも二機分の落下エネルギーは……！うッ！」

「どうして貴方は、いつもそんなことばかり言っんですか！」

「じゃあ何を言えればいいんだ」

「俺を助けるこの野郎！とか……」

「ふ。その方がいいのか？」

「ふふ。いえ、ただの例えです」

「じゃあ……助けてくれ、ルナマリア」

「……はい！」

ミネルバはどこ？

あ、発光信号！ 1時の方向！

あたしたちは、なんとか帰艦した。

「……MSで大気圏に突入するなんて……全く、無茶な奴だな君は」

「アスランに言われたくないですよ」

「はは、全くだ。助かったよ。ありがとう」

「……別に、無我夢中だっただけですよ」

「それでもいいさ。君は俺の命の恩人だ。この恩はきつと返すよ」
「……変な人ですね。ヤキンの英雄ってもっと別な人を想像してた」
「よく言われるよ」

あたしたちがMSから降りると、あのお姫様がやってきた。

「アスラーン！」

！ 艦が揺れた！ 何！？

「なに？まだ何か！？」

「地球を一周してきた最初の落下の衝撃波だ。おそろくな」

「そう……地球、あまりひどい事になってなけりゃいいけど」

……

あたしたちが收容されてからしばらくして、ミネルバは初めてその身を地球の海に浮かべる。

『警報。総員着水の衝撃に備えよ』

休憩室の椅子に座り、片手を椅子の背にまわして固定する。

まるで舗装されていない地面を走ったように艦がバウンドし、しばらく経つと、止んだ。

『着水完了。警報を解除。現在全区画浸水は認められないが今後モ警戒を要する。ダメージコントロール要員は下部区画へ』

ふう。一安心ね。

……
みんな、手隙の者は上甲板に出ている。やっぱり地球の海が見てみたかった。

うーん、なんか臭い。

「けど地球か」

「太平洋つて海に降りたんだろ？俺達。うっはは、でけー」

「ヴィーノ！ そんな呑気なこと言っつてられる場合かよ。どうしてそうなんだ、お前は」

「人のこと言えるのかよ、ヨウラン」

「大丈夫か？アスラン」

「ああ、大丈夫だ」

向こうでお姫様とアスランが話してる。

「けどほんと驚いた。心配したぞ。モビルスーツで出るなんて聞いてなかったから」

「すまなかつた、勝手に」

「いや、そんなことはいいんだ。お前の腕は知ってるし。私はむしろ、お前が出てくれて良かったと思ってる」

「？」

「ほんとにとんでもないことになったが、ミネルバやイザーク達のおかげで被害の規模は格段に小さくなった。そのことは地球の人達も……」

「やめるよこの馬鹿！」

「シンー！」

「ええまたあ？」

「またって事は、シンも結構言っちゃった訳？あのお姫様に」

「ああ、ヨウランの時、ルナが出てった後にね。やっと言えるぞって勢いで」

「あんだだってブリッジに居たんだ！ならこれがどついつことだったか解ってるはずだろ！？」

「ええ……」

「シン」

「ユニウスセブンの落下は自然現象じゃなかった。犯人が居るんだ！落としたのはコーディネーターさ！」

「ああ……」

「あそこで家族を殺されてそのことをまだ恨んでる連中が、ナチュラルなんか滅びろって落としたんだぞ！？」

「ああ……わ、解ってるそれは……でも！」

「でもなんだよ！」

「お前達はそれを必死に止めようとしてくれたじゃないか！」

「当たり前だ！」

「ええ？」

「だが……それでも破片は落ちた。俺達は……止めきれなかった」

「アスラン……」

「一部の者達のやったことだと言っても、俺達、コーディネーターのしたことに変わりない。許してくれるのか……それでも……」

アスランは、甲板から中へ入って行ってしまった。

「奴等のリーダーが言ったんだ」

「え？」

「俺達コーディネーターにとって、パトリック・ザラの執った道こそが唯一正しいものだってさ！」

「あ！……アスラン……」

「あんたってほんと、何も解ってないよな。あの人が可哀相だよ」

アスラン……吹っ切れてはいたようだけど。あんな事言われたんじや辛いよね……

……

しばらくたって、外で射撃の訓練をやることにした。どうせなら外の方が気持ちいいものね。

……弾倉をひとつ撃ち終わる。集弾率低いなあ。やっぱあたし射撃へただわ。はう。

「ん？ あら！ アスラン！」

「訓練規定か」

「ええ、どうせなら外の方が気持ちいいって。でも調子悪いわ」

「ん……」

「あ、一緒にやります？」

アスランに、ちょうどいい気分転換になるかもしれない。あたしは、アスランにいつまでも沈んだ雰囲気であって欲しくなかった。

「え……いや俺は……」

「ふ……ほんと私達みんな、貴方のことよく知ってるわ」

「え？」

「元ザフトレッド、クルーゼ隊。戦争中盤では最強と言われたストライクを討ち、その後、国防委員会直属特務隊フェイス所属。ZGMF-X09A、ジャスティスのパイロットの、アスラン・ザラでしょ？」

「……………」

「お父さんのことは知りませんが、その人は私達の間じゃ英雄だわ。ヤキン・ドゥー工戦でのことも含めてね？」

「ああ……………あれいやあ……………」

「射撃の腕もかなりものと聞いてますけど？」

「お手本。見せてくださいよ。実は私あんまり上手くないんです」

「ふふ。じゃあ」

「うわー！ アスラン！ あたしと違って動局的を撃ってるのに！

みんな真ん中！

「ああ……………すごい」

「うわー、同じ銃撃ってるのになんで!？」

「銃のせいじゃない。君はトリガーを引く瞬間に手首を捻る癖がある。だから着弾が散ってしまうんだ」

「こんなことばかり得意でもどうしようもないけどな」

「そんなことはありませんよ。敵から自分や仲間を守るためには必要です」

「敵って……………誰だよ」

「やばい！ なにか彼の傷に触るような事言った!？ 彼はあたしをにらむと艦内へ入ろうとした。」

「ミネルバはオーブに向かうそうですね。貴方もまた戻るんですか？オーブへ」

「ああ、シン」

「なんでです?」

「……………」

「そこで何をしてるんです? 貴方は。貴方の居場所はザフトじゃないんですか?」

アスランはしばらく立ち止まって、そして中へ入って行った。

あたしは考えてみた。なぜアスランがあんな反応を示したのか。あたしにとって敵と言えば、セカンドシリーズを強奪したような奴ら。あたしとあたしの仲間を攻撃してくる物だけど、アスランの考えはきつともつと深い。

きつとお父さんを信じて戦っていたけど、お父さんはいつの間にかナチュラル滅亡なんて事企てて。上から言われるままに戦う事に疑問を持ったんだろう。上から敵と言われる者を敵とする事に。だからかつての敵アークエンジェルとも共闘した。そんな彼にとって、あたしの答えは単純で幼稚に見えたんだろうなあ……

平和の島

1日後、あたしたちはオーブに着いた。軍事島と言うオノゴロ島へ案内された。

オーブは幸いユニウスセブンの被害は少なかったそうだ。

修理には数日はかかるらしい。進水式もまだだと言うのに、まるで歴戦の艦みたいになって複雑な気分だ。

「え本当？」

「いやあまだ分からないけどさ、修理で数日って事になるんなら案外出るんじゃないかって。上陸許可」

「うわあ」

「ちよつとここまできつかったからなあ実際。なんか夢中で来ちゃったけどむっちゃくちゃだったもんな、ほんと」

「もしかしたら出るかもしれないな、上陸許可。でも、あまり浮かれすぎない方がいいぞ。お前ら」

「そうよ？オーブも少ないとは言えユニウスセブンの被害受けたらしいし」

「そうそう。ザフトの者だって、知られない方がいいかも知れないわ」

「手厳しいな、ショーンもゲイルもルナも」

みんなが浮かれるのを、パイロット連中が引き締める形になってしまった。でも、あたしたちパイロットは、何か戦場が近いような、妙な雰囲気を感じていたのだ。

でも実際上陸許可が出ると嬉しい物で。なんとなく後ろめたさを感じてしまう。

「シン？居ないの？シン。もお……」

「いないの？シン」

「呼んでも全然返事がないのよ、ゲイル」

「いないものはしょうがない、俺たちだけで行こう。ルナ、ゲイル、レイも誘ったんだが来ないってさ。ガイアの扱いに習熟したいらしい」

「あちゃー。あたしもせっかくザクフロントム任されたのに、気が咎めるじゃない」

「まあ、一日リフレッシュして頑張ればいいさ、ゲイル」

……

「でも、せっかくシンにオーブ案内してもらおうと思ったのにな」

「……ああ！ そうか」

「なによ、シヨーン」

「ここは、シンの故郷と言っても、ご家族を亡くされた場所でもあるだろう。そのままオーブにいても良かったものを、わざわざプラントに移住して来たんだ。辛かったろうな」

「そっか。上陸だって、浮かれる気分にはならないよねえ」

「まあ、墓参りにでも行くかも知れんが、なおさら俺たちとじゃ行く気はしないだろ」

「そうねえ」

「じゃあ、シンには悪いけどあたしたちは楽しみましょよ。せっかく出てきたんですから」

オーブは、前大戦時結構な被害を蒙ったと聞いていたけど、復興振りはすごかった。

「すいぶん、早いね、復興するの」

「前大戦時は、最後は一応連合側だったし、現在宰相を務めている

ウナト・エマ・セイランは大西洋連邦寄りの政治家だって話よ。結構大西洋連邦の復興資金が流れ込んだらしいわ」

「詳しいのね、ゲイル」

「まあ、大西洋連邦と言う大国のコネと金の力で復興を成し遂げたって訳よ。オーブは一旦ぼろぼろにされたんですけども、自力だったらまだマストライバーを再建するのがせいぜいかも」

「その代わり、国の結構な部分が大西洋連邦のひも付きになっちゃまったって訳だ。表向きは、あのお姫様自身は父譲りの中立でも、国全体として見るならもうこの国は中立じゃない」

「……やっぱり、気を抜かない方がよさそうね」

それでも、やっぱり広い所に出て街をぶらぶらするとリフレッシュできた

そんな気分を一編させるようなことが3日後起きた。

『コンディションイエロー発令、コンディションイエロー発令。艦内警備ステータスB1。以後部外者の乗艦を全面的に禁止します。全保安要員は直ちに配置について下さい』

連合がプラントに宣戦を布告したのだった……

「で、状況はどうなのよ、ルナ。人の行き来は禁止になっても情報はまだ大丈夫でしょう？」

「うん、ゲイル。メイリンから聞いた話じゃ、開戦劈頭プラントに核攻撃が行われたって」

「……ルナが落ち着いてるって事は、無事撃退したんだな？」

「うん、なんか、ザフトの新兵器が使われたみたいで核攻撃艦隊は全滅したらしいわ」

「ふう。よかった。ここに籠ってる間にプラントが滅びたんじゃ帰

るところが無くなっちゃう」

その後数日、あたしたちは乏しい情報に一喜一憂した。それも、もう終わり。オーブが連合と同盟を結ぶと言うのだ。ミネルバは明朝出航する。

『発進は定刻通り。各艦員は最終チェックを急いで下さい。砲術B班は第三兵装バンクへ。コンディションイエロー発令。パイロットはブリーフィングルームへ集合して下さい』

「……けど、ザフトの降下作戦でいつ？」

「知らないわよ私も。しっかしこれでオーブも敵側とはね。けっこう好きだったのになこの国。……あごめん。シンには辛いね」

「別に」

あ、オーブのお姫様!?

「あ………!」

「あ………何しに来た」

「う………」

「あの時オーブを攻めた地球軍と今度は同盟か!」

「う………」

「何処までいい加減で身勝手なんだ!あんた達は!」

「いやこれは………」

「敵に回るって言うんなら今度は俺が滅ぼしてやる!こんな国!」

「うっ……シン!」

後でメイリンに聞いた。

彼女はわざわざ連合とオーブが同盟を結ぶ事を伝えに来たのだった。オーブがその気ならミネルバを手土産にする事もできたかもしれないな

いの。彼女も苦勞してるんだな……

……

それはミネルバがオーブ領海を出てすぐだった。

『コンディションレッド発令。コンディションレッド発令。パイロットは搭乗機にて待機せよ』

「レッドって何で！」

「知らないわよ！ 何であたしに聞くの？」

『タリア・グレイディスよりミネルバ全クルーへ』

『現在本艦の前には空母4隻を含む地球軍艦隊が、そして後方には自国の領海警護と思われるオーブ軍艦隊が展開中である』

「空母4隻！？」

「後ろにオーブが！？」

『地球軍は本艦の出港を知り、網を張っていたと思われ。またオーブは後方のドアを閉めている。我々には前方の地球軍艦隊突破の他に活路はない。これより開始される戦闘はかつてないほどに厳しいものになると思われるが、本艦はなんとしてもこれを突破しなければならぬ。このミネルバクルーとしての誇りを持ち、最後まで諦めない各員の奮闘を期待する』

「くっそー！」

「手厳しいわね」

あのお姫様も立派な狸だったって事か。あたしの中の彼女の評価を

改めた。

あたしとシンには艦からあまり離れるなど言われた。レイ、シヨーン、ゲイルは甲板上から敵MSを狙撃だ。

『カタパルト推力正常。針路クリアー。グファイグナイトッド発進ど
うぞー！』

「ルナマリア・ホーク、グフ、出るわよ！」

「シン・アスカ、インパルス、行きます！」

あたしたちは空中に飛び立った！

オーブ沖海戦

ミネルバは左を突破するらしい。

「シン！ 左側に敵を追い込んで！」

「了解！」

あたしたちが突っ込むと敵MSは鳥が逃げるように散開する！

一機、二機！ シンが射撃で落とす！

「逝けー！ー！」

左に回りこみドラウプニル4連装ビームガンを両手から連射する！
シンに追われて逃げた敵に面白いように当たる！ 撃たれて動きが鈍った敵をスレイヤーウィップで止めを刺していく！

ミネルバに被弾！？

「く、こんなことで……やられてたまるもんですかーッ！」

敵の密集した所へ所へと突っ込み、後ろを見せる敵をスレイヤーウィップでなぎ倒す！

確かに半端じゃない数だけど！ それだけ逃げる場所がないって事よ！

敵に密着すれば、他の敵はあたしを撃てない！ そう割り切って突っ込み、ドラウプニルを叩き込む！

左前方から何かが発進し、近づいてくる！ あれは！大型のMA！
あんなのがミネルバに取り付いたら終わりだ！

迎撃に向かおうとすると通信が入った。

『タンホイザーで敵大型MAと共に左前方の艦隊を薙ぎ払います！
気をつけて！』

あわてて射線から離れる！

敵大型MAは、前傾姿勢を取ると何か力場を発生した！？

タンホイザーの光が射線上の物体を包んで行く！
閃光が晴れた時

「ああ……！ タンホイザーを、そんな……跳ね返した？」

若干沈んだ艦はあったものの、敵大型MAから後ろの艦隊はまったく無傷だった。

「シン！ あいつをやらないと！」

「わかってる！」

「一部分でいい！ 敵MAの対空防御に穴を開けて！そこから突っ込む！」

「了解！」

シンが突っ込む！敵MAの主砲らしきものと赤熱したクローがシンの方を向き、前傾して力場を張りながら攻撃する！

チャーンズ！ シールドを構え、テンペストを抜きながら上空から高速で降下し、敵MAの懐に入る！

テンペストは敵MAの分厚い装甲を容易く切り裂いていく！

敵大型MAは落ちて行き海上で爆散した！

「シン！ 次は艦隊をやるわ！ 援護して！」

「了解！」

敵の艦に次々に取り付くと、あたしはブリッジを、砲塔を潰して行く！

「空母が沈めば！」

あたしは空母に取り付いた！ブリッジを切り裂くと、甲板にテンペストを突き刺し、切り裂く！

もう一隻！ 次の空母に取り付き、切り裂く！ 空母はグズグズと沈んで行く！

……そして、気がつくと敵全軍は撤退して行った！

……もう、これ以上の追撃はないかな？

あたしたちは帰艦した。

「ルナー！」

コクピットで休んでいると、ヴィーノが声をかけて来た。降りよっか。

「ん？ あらら」

床に降りると私はへたりこんでしまった。

「あはは、よくやったな、ルナ！」

「お疲れさん」

「すげーな、おい」

「聞いたぜーこのー。すっげー活躍だったんだって？」

「いやーほんとよくやってくれたー」

「へへ、ありがとう」

「さあ！ ほらもうお前ら！ いい加減仕事に戻れ。カーペンタリ
アまではまだあるんだぞ。パイロットも休ませてやらなきゃ」

エイブズさんが言うと、メカニックの人たちは散って行った。

「ほんと、今日はよくやったよ。スーパーエース級じゃないか」

「ありがとう、シヨン。自分でも、ここまでやれるとは思わなかつたわ。まあシンが援護してくれてたから落ち着いて攻撃もできたし」
「なににせよお前が艦を守った。生きているということはそれだけで価値がある。明日があるということだからだ」

「……ん。ふふ。ありがとう、レイ」

「さあ、休憩しようぜ。じゃないといざって時動けないからな！」

英雄の帰還

カーペンタリア、入港！
みんなわくわくしてる

「オーブもよかったけどさ、やっぱり違うよな、ルナ」
「そうよね。味方に囲まれてるっていいなあ！」
「海の色も、オーブに負けなくらいきれいよね」

上陸が許された。なにしようかな。

「ルナー、買い物行かない？」
「行く行く！ メイリン、行くでしょ？」
「うん！ 色々補充したい物があるし」

「メイリン、そんなに買うの？」
「だってさあ、ミネルバの修理つてもうじき終わるんでしょ？」
「ああ、まあね」

「じゃあ、いつ出航命令出るか分かんないじゃない。やっぱり今のうちに買つときゃなきや」

「はあ……あつそ。何が何でそんなにいるんだか知らないけど」
「う…悪かったわね」

「メイリン、忠告よ」
「な、なんですか、ゲイルさん？」

「ダイエツトサプリメントなんかより、規則正しい運動よ！ なにしるメイリンは座ってるのが仕事なんだから運動不足になりやすいのよ」

「うう……」

……
ミネルバに帰ると、ザクウォーリアが搬入されていた。もう旧式化してきたゲイツRが降ろされる。ザクウォーリアにはショーンさんが乗ることになる。

「やっぱりいいなあ。新型は。正直、ゲイツじゃきつく感じてたんだ」

「激戦続きだったですからね」

「ウィザードシステムもあたしのザクファントムと共有できるし、運用もしやすくなるそうよ」

その時、一機の赤いMSが、ミネルバのカタパルトに降りてきた。

「何なのこの新型。一体誰？ エイブスさん聞いてる？」

「いや」

パイロットが降りてきて、ヘルメットを脱ぐ。

「ああ！ アスラン！」

「認識番号285002、特務隊フェイス所属アスラン・ザラ。乗艦許可を」

「ねえさっきの……あんた！ なんだよこれは？ 一体どういう事だ！」

「もう！ シン、口の利き方に気を付けなさい！ 彼はフェイスよ」

「ええ？ 何であんたが……」

「シン！」

「あ……」

シンは荷物を置くとあわてて敬礼した。

アスランも、皆に答礼する。

「ふ。艦長は艦橋ですか？」

「ああ、はい。だと思います」

「確認して御案内します」

「ありがとうございます。ルナマリア」

私達が歩き出すと、シンがアスランに話しかけた。

「ザフトに戻ったんですか？」

「そういうことに、なるね、シン」

「何でですか？」

「…ふ…」

アスランはシンに微笑むと再び歩き出した。

艦長は艦長室にいると言う事だった。

「でも、なんで急に復隊されたんですか？」

「え？」

「な〜んで、とつても聞いてみたいんですけど、いいですか？」

「……復隊したというか、まあうん、ちょっとプラントに行って議長にお会いして……」

「え？」

「それより、ミネルバはいつオーブを出たんだ？俺、何も知らなくて」

「オーブへ行かれたんですか！？」

「ああ」

「大丈夫でした！？あの国、今はもう……」

「スクランブルかけられたよ」

「なんだかシンが怒るのもちよつと解る気がします。滅茶苦茶ですよあの国。オーブ出る時、私達がどんな目に遭ったと思います?」
「ん?」

「カーペンタリアを包囲していたはずの地球軍の艦隊に待ち伏せされて、ほんと死ぬところだったわ。もうちよつとで沈んでました、ミネルバ」

「けどカガリがそんな……」

「でも私、失礼だけど馬鹿姫様だと思ってたんですけどね。見直しましたよ。なかなかの狸じゃないですか。出航前にミネルバに来て大西洋連邦と同盟組むこと知らせて謝って油断させたり。そういうえば、ミネルバが出航した後結婚したらしいですよ」

「結婚!?!」

「ええ…ちよつと前に…そうニューズで……」

「あ……」

あ、アスラン、固まっちゃった。

「あのお……」

「え?あ……」

「あの! でも、式の時だけ後だけに攫われちゃって、今は行方不明……」

「ええ!?!」

「とかつて話も聞きました。良く解らないんですけど。済みません」
「あ……」

もつと話したかったけど、残念ながら艦長室に着いてしまった。でもいいや。これから話す機会はいくらでもあるだろうから!

あたしはモビルスーツデッキに戻ると、セイバーと言うMSを見上げていた。外見は、インパルスやガイアと似ている。

あ、アスラン！

……なんか心ここにあらずと言ふ感じで歩いて来てセイバーのコクピットに上がるうとした。

「ちよつと、無視しないで下さいよあ」

「え？ ああ、いやそんなつもりはなかったけど……なんかいろいろあつたんでちよつとボーっとしてただけだ」

「そんなにシヨックだったんですか？ アスハ代表の結婚」

「う！ いや、まあ、あれは……」

でも思いつきり政略結婚ですもんねえ。しょうがないと言つか。あたしだつたらそんなの絶対嫌だけど」

「で、ルナマリア、何？ 何か用？」

やっぱり相当シヨックだったらしい。あまり触れられない話題みたいだ。話題を変えよう。

「この機体は？ 最新鋭ですよねえ？ 変形機構を持ってるって聞きましたけどお」

「ああ……」

「うわあ！ やつぱりグフとは全然違う！ インパルス、って言うか力オスとかと同じ？」

「座ってみたいか？」

「いいんですか！？」

「ああ、どうぞ。でも動かすなよ」

「解ってますよ。ああ、モードセレクタのパネルが違つんだあ。あ！ 新しいプラグインですね？」

「ああ、うん」

その時、艦内放送で、明朝の出航が告げられ、あたしもグフの調整に戻った。

アスランとは楽しく会話できた、かな？でも、やっぱりアスランはなんかいまいち心あらずと言う感じだった。

早く立ち直って欲しいと思う。明日からまた実戦の日々なのだから。

翌朝、あたしたちは出航した。ボズゴロフ級潜水母艦のニーラゴングも一緒だ。

「なに窓にへばりついて見てんだ？」

「シンこそ、なにこんな時に雑誌なんか見てるのよ」

「いいだろ別に」

「じっくり見ておきたいのよ。ここは、また来たい場所の一つになったから。それに、ニーラゴングの姿も。僚艦がいるっていいわね」

ジブラルタルへ向かえ。現在スエズ攻略を行っている駐留軍を支援せよ。と言うのがミネルバに与えられた指令だ。連合に組した赤道連合は、俗に言うブレイク・ザ・ワールドで大きな被害を受けたと言う。他人の不幸を喜ぶようだけど、たぶんこちらに手を出す余裕がないだろう事はありがたい。

その期待は裏切られた。網を張られていたのだろう。インド洋に入った時だった。

『コンディションレッド発令。コンディションレッド発令。パイロットは搭乗機にて待機せよ』

『インパルス、セイバー、グフ発進願います。ザクは別命あるまで待機。』

『インパルス、フォーシシルエツト装着。発進スタンバイ。全システムオンラインを確認しました。気密シャッターを閉鎖します。カタパルトスタンバイ確認』

『X23Sセイバー、アスラン機、発進スタンバイ。全システムオンラインを確認しました。気密シャッターを閉鎖します。カタパルトスタンバイ確認』

『グフイグナイトッド、発進スタンバイ。全システムオンラインを確認しました。気密シャッターを閉鎖します。カタパルトスタンバイ確認』

発進シークエンスが次々に進んで行く。あたしは気が楽だった。なんとと言ってもアスラン、セイバーの存在が心強い。

「ルナマリア、シン」

「はい」

「ん？はい」

「発進後の戦闘指揮は俺が執ることになった」

「了解しました！」

「え？」

「シン、いいな？」

「……はい」

「シン・アスカ、コアスプレnder行きます！」

「アスラン・ザラ、セイバー発進する！」

「ルナマリア・ホーク、グフイグナイトッド、出るわよ！」

あたしたちは次々に大空へ飛び立った！

インド洋の激闘

敵機は約三十機！

「ええい！数ばかりゴチャゴチャと！」

「オーブ沖を思えばたいしたことはないわ！ 飲まれずに行くわよ

！」

「ルナマリアの言う通りだ！ 言う必要はないと思うが飲まれるな

！」
敵機の中にカオスが混じっていた。奴はセイバーを相手と決めたようだった。他には……

「色が違う赤紫のウィンダムが一機！ 指揮官機と思われる！ 注

意！」

「わかった！」

「シン！ オーブ沖のように！」

「よし！ 左側に追い込む！」

シンの射撃で敵機は次々と数を減らして行く！

あたしもシンに追い込まれる敵機をドラウプニルとスレイヤーウィップで仕留めて行く！

カオスやアビスと戦ってきたあたしには、敵機のビームライフルの取り回しがもたついて見えるくらいだ。

インパルスが目をつけられた！？ インパルスが赤紫のウィンダムに翻弄され、他のウィンダムのいきなり統制の取れた射撃に襲われている！

「させるもんですか！ あたしを忘れないでよね！ 横合いから思い切り！ 殴りつける！」

密集してインパルスに射撃を集中している敵機に飛び込むとドラウブニルを連射しながらスレイヤーウィップを叩きつける！
密集なんかする方が悪いのよ！ 一撃で数機が落ちる！ 二撃でまた数機！

「助かる！ ルナ！」

「お互い様！」

！ 海中から爆発が！

「ミネルバ！今は！？」

「アビスです。ニーラゴングのグリーンと交戦中」

「えー！」

「でも一機よ。レイ、シヨンとゲイルで対応します。それより敵の拠点は？そちらで何か見える？」

「いえ、こちらでも何も。しかし……」

「シン、後はカオスと指揮官機よ！ カオスはアスランが抑えてる！指揮官機をなんとかこっちに追い込めない？ 加速性能じゃ負けてるの！」

「やってみるけど、こいつ、早い！」

戦闘に参加できないことが口惜しい。ふと下を見ると、あれは基地！？ 画面を拡大する。

「こんなところに……建設中？ あ！ 逃げようとしてる人が撃たれてる！まさかこの民間人を……」

許せない！ あたしは基地に降下して行った！

対空砲が撃ってくるけどシールドで十分！まっすぐ降りてドラウプニルで対空陣地を叩き潰す！

！ 通信の会話が入ってきた！ ニーラゴンゴが沈んだ！？
せっかくできた僚艦を！

あたしは無言で基地内をドラウプニルとスレイヤーウィップで壊しまくった。

「ルナマリア！何をやってるんだ！やめろ！もう彼等に戦闘力はない！」

民間人が、柵で隔てられてる。一緒になりたいのね？ 柵を壊して隙間を作ると、民間人は歓声を上げて抱き合った。よかった。

あたしは暖かい気持ちでミネルバへ帰艦した。

パシィン！

あたしは、MSから降りるなりアスランから頬をぶたれた！

「殴りたいのなら別に構いやしませんけどね！ けど！ 私は間違ったことはしてませんよ！ 降伏しない限り、降伏の意思表示ができなくなる状況にならない限り敵は敵です！」

パシィン！

また、頬をぶたれた！

「その事じゃない！ 一人で戦争をしている気になるな！ 自分だけで勝手な判断をするな！」

そう言うとアスランはモビルスーツデッキから出て行った。

……

その夜。あたしは甲板に出て星空を眺めていた。

「ここにいたのか、ルナマリア」

「あ、アスラン！？」

「いや、きちんと話しとかなきゃと思ってな」

「……」

「敵への攻撃については、君の言う通りかもしれない。しかし、君を殴った訳は違うんだ」

「……」

「言つたろう、自分だけで勝手な判断をするなど。あの時は、基地の場所の報告だけをして、戦闘を続けるべきだった。もしかしたら君のところにカオスか指揮官機を追い込められていたかもしれないんだから。君はカオスを撃破した経験がある。そうなったら、また撃破できた可能性は高い。自分の力を自覚しろ。君は勝手に抜けられていい存在じゃない」

「……はい」

「それに、勝手に基地を攻撃した。基地の防備が薄かったからよかつたものの、もし、厚かつたらどうするんだ。きちんと偵察して、それから攻撃するべきだ。つまらないことで仲間を失いたくない。わかるな？」

「……はい……ごめん、なさい……」

「な、泣くな。……困ったな」

ふわりとあたしの体がアスランの腕に包まれた。

「もう、泣くな。怒ってやしないから」

アスランの手が優しく頭をなでる。

「……はい、ありがとう。アスラン……」

「その、大丈夫かよ、ルナ」

「なにがー？」

「ほら、昨日ザラ隊長にぶたれたる。ほんとひどいよな。いきなり出戻ってきてフェイスだ上官だって……」

「私は気にしてないわ。叩かれた理由が納得できたから」

「そ、そうか？」

「シンこそ、前は、ザラ隊長に、貴方がいる場所はザフトだって言っただじゃない」

「あ、あの時は……」

「結構影響されたのかもよ？ シンの言葉に！」

「そ、そうかなあ」

「ザラ隊長、いい上官だと思うわ。あんたも素直になりなさいよ。憧れのアスランがザフトに復隊してくれて嬉しいんでしょっ？」

「そりゃ、嬉しくないことも無いさ」

「なら、いいじゃない」

「ま、ルナがいいならいいんだ。俺は別に」

「あ、噂をしてたら！ ザラ隊長！ おはようございますー！」

「やあ、おはよう。ルナ、シン。いい天気になりそうだな。……朝

飯はまだか？ よかったら一緒に食べるかい？

「いいですよ」

「喜んで！」

ローエン格林を討て！

僚艦のニーラゴongoを失ったミネルバは、速度を上げ数日後にはペルシャ湾の奥、バスラ近郊のマハムール基地に到着した。

外に出るのも暑いしあたしたちはモビルスーツデッキで地上戦用の調整をしていた。

「あ、ザラ隊長！」

あたしは悩んでいるところをアスランにアドバイスしてもらった。

ヨウランとヴィーノが何か話してる。

「それに今度、衣装もなぐんかバリバリ？」

「そうそう！そしたらさあ胸、けっこうあんなあ。今度のあの衣装のポスター、俺絶対欲しい！」

「ああッ！アスランさん！」

「セイバーの整備ログは？」

「……ああとこれです！」

「ありがとう」

「あっはは……」

「はあ……」

「婚約者だもんなあ。いいよなあ」

「ちえ。ケーブルの2、3本も引っこ抜いといてやるうか？セイバ

「聞こえてるぞ二人とも」

「ああッ……」

「さっきのも全部」

「ああすいません！」

まったく何やつてるんだか！……でも、そうだ。アスラン、ラク
ス・クラインの婚約者なんだよねえ。
ふう。

夕方、あたしたちはようやく涼しくなつて来た外の空気に触れに甲
板に出ていた。

「んー、ようやく涼しくなつたわね」

「ええ、夕焼けが鮮やかー！」

「なんかすごい大きく見えるな」

「この地域から文明が興つたのよね。観光で来て見たいわ」

「ここにいたのかシン」

「なんか用ですか？ ザラ隊長」

シンは、まだちよつとつつつかつかるような口調だ。癖つて抜けない
もんねえ。

「……ふ。次の作戦は知ってるな？」

「はい。ガルナハンを落とすんでしよう？」

「落とすと言うか開放すると言うか、ま、そんな所だ。ガルナハン
を開放すれば、スエズは孤立するし、ユーラシア西側の反乱勢力も
息を吹き返す」

「それで？」

「次の作戦、お前が鍵だ」

「え？」

「頼りにしてるぞ」

そう言うと、ぽん、とシンの肩を叩いてアスランは艦内に入った。

「やったじゃん！ シン」

「期待されてるんだ。頑張れよ」

「へへ」

シンもまんざらじゃなさそうに、にやけた。

『パイロットはブリーフィングルームへ集合してください』

「これから、現地の協力員が来るんだって」

「けど、現地協力員で、つまりレジスタンス？」

「まあそういうことじゃない？ 連合に締め付けられて、だいぶ酷い状況らしいからね、ガルナハンの街は」

あたしたちは籍に着いた。

現地の協力員は、あたしたちより若い少女だった。

「子供じゃん」

「シン！」

「着席。さあいよいよだぞ。ではこれよりラドル隊と合同で行う、ガルナハン・ローエングリングート突破作戦の詳細を説明する。だが知っての通り、この目標は難敵である。以前にもラドル隊が突破を試みたが… ああ… 結果は失敗に終わっている。そこで今回は、アスラン」

「え？」

「代わるう。どうぞ。あとは君から」

「ああ…はい。ガルナハン・ローエンゲリンゲートと呼ばれる渓谷の状況だ。この断崖の向こうに街があり、その更に奥に火力プラントがある。こちら側からこの街にアプローチ可能なラインは、このみ。が、敵の陽電子砲台はこの高台に設置されており、渓谷全体をカバーして何処へ行こうが敵射程内に入り隠れられる場所はない。超長距離射撃で敵の砲台、もしくはその下の壁面を狙おうとしても、ここにはモビルスーツの他にも陽電子リフレクターを装備したモビルアーマーが配備されており、有効打撃は望めない。君達はオーブ沖で同様の装備のモビルアーマーと遭遇したということだが？」

「あ、はい！」

「そこで今回の作戦だが……」

「そのモビルアーマーをぶっ飛ばして、砲台をぶっ壊し、ガルナハンに入れればいいんでしょ？」

「それはそうだが、俺達は今どうしたらそうできるかを話してるんだぞ。シン」

「俺たちがモビルアーマーをやっつけた時の手は使えないんですか？」

「うん、そのモビルアーマーの護衛にも、多数のモビルスーツが確認されている。やれるかもしれないが、難しいだろう。今回は危ない橋は渡れない」

「そうか……」

「そこでだ、現地の協力員が、地元の人あまり知らない坑道を教えてくれる。それは陽電子砲のすぐそばに通じている。出口はふさがっているが、ちょっと爆破すれば抜けられる。そこから奇襲をかける」

「全員で行くんですか？」

「いや、残念ながらその空洞は、モビルスーツが入れるほど大きくないんだ」

「じゃあ、どうやって……」

「シン、君のインパルスは航空機に分離できる。それならぎりぎり通過できる。俺達が正面で敵砲台を引き付け、モビルアーマーを引き離すから、お前はこの坑道を抜けてきて直接砲台を攻撃するんだ。」

「なるほど、それで俺が鍵か。やらせてもらいますよ」

「ああ。ただし、空洞内は真っ暗で視界が利かない。データが頼りだ。ミス・コニール」

「あーはい」

「彼がそのパイロットだ。データを渡してやってくれ」

「……」

彼女は、シンの顔をじっと見つめた。

「子供って言ったな。でも、こんな子供でもなきや監視が厳しくて街を抜け出せないんだ。前にザフトが砲台を攻めた後、街は大変だったんだ。それと同時に街でも抵抗運動が起きたから。」

「あ……」

「地球軍に逆らった人達は滅茶苦茶酷い目に遭わされた。殺された人だって沢山いる。今度だって失敗すればどんなことになるか判らない。だから、絶対やつつけて欲しいんだ！あの砲台、今度こそ！失敗したら街のみんなだって今度こそマジ終わりなんだ！だから、頼むぞ！」

「……わかった。任せろ！」

ガルナハン解放

「インパルス発進スタンバイ。パイロットはコアスプレnderへ。中央カタパルトオンライン。気密シャッターを閉鎖します。中央カタパルト、発進位置にリフトアップします。コアスプレnder全システムオンライン」 「発進シーケンスを開始します。ハッチ開放。射出システムのエンゲージを確認。カタパルト推力正常。進路クリア。コアスプレnder発進、どうぞ」

「シン・アスカ、コアスプレnder行きます！」

「カタパルトエンゲージ。チェストファイヤー射出、どうぞ。レッグファイヤー射出、どうぞ」

「思えば、これが初めてのコアスプレnderでの発進かもしれない。シン、頑張つて！」

「あたしたちも発進する！」

「ルナマリア・ホーク、グフ、出るわよ！」

「ミネルバがタンホイザーを撃とうとする。敵の大型モバイルアーマーが前面に出てくる！」

「陽電子リフレクターに陽電子ビームが弾き飛ばされる！ 巻き上がる土煙」

「行くぞ！ 敵モバイルスーツ隊も出来るだけ引き離すんだ！」

「了解！」

今度はローエングリンゲートからの砲撃！ 再び巻き上がる土煙！

敵MS隊が上空からあたしたちを攻撃する！

「くッ！」

「あいつが下がる！ルナマリア！う…！」

敵大型MAが下がろうとしていた。

「させるもんですか！ 援護お願い！」

シヨーンとゲイルの援護の下、あたしとアスランはミサイルをかわしながら空に飛び立つ！

レイのガイアもMA形態になって駆ける！

あたしは両腕を前に出してドラウプニルを連射してミサイルを迎撃！ 上空の敵MSの群れに飛び込むとスレイヤーウィップで薙ぎ払う！

ローエングリン砲台付近に爆発！ コアスプレnderだ！
敵に動揺が走る！

「シン！ 来たのね！ モビルアーマーは私達に任せて砲台を！」
「了解！」

アスランがその機動で敵MSを散らしてくれる。道は開いた！ 下からせないわよ！ モビルアーマー！

それは、オーブ沖で見たMAと違って、上部に通常のMSの上半身

が付いていた。両腕にビームライフルを持って撃ってくる！
でも……こいつ、オーブ沖のMAより弱い？ そうか！ 地上に這
つてなんかいるから！

あたしはシールドでビームを防ぎながら突撃！ スレイヤーウィッ
プでMS型の上半身を切り飛ばした！

さあ、もう終わりよ！ コクピットに両腕のドラウプニルをぶち込
むと敵MAの動きは止まった！

ローエングリン砲台は！？

「シン！ MSや通常の砲台なんか後回しでいい！ 陽電子砲を破
壊しろ！」

「わかつてますよ！」

あたしも陽電子砲台に向かう！ 陽電子砲は下に収納されていく所
だった！ 更にまだ陽電子砲の前に敵MSがいる！ 間に合うか！？

「うあああぁー！！」

シンが敵MSを閉まっていく穴の中へ突き落とす！ まだまだ！

あたしはテンペストでシャッターを切り開くとドラウプニルをぶち
込んだ！ 爆発が始まる！

「ミッション成功！ 退くわよ、シン！」

「ああ、やったな！」

……

あたしとアスランとシンは、ガルナハンの街に降り立った。

コニールがお父さんらしき人に担ぎ上げられてる。シンはMSを降

りて行つた。下でもみくちやにされてる。

『ご苦労だったわね、アスラン、ルナマリア。あとはラドル隊に任せていいわ。帰投してちょうだい』

「了解！」

街のあちこちで、地球軍の軍旗が焼かれたりしている。

……嫌な物を見てしまった。

「アスラン、あれ、地球軍の人たちが、殺されてる……いいんですか？ ガルナハンの人たちにひどい事してたって言っても。裁判も無しに、こんなリンチ」

「……今は、しかたないだろう」

アスランは苦い声で言った。

「ここの人たちにとっては、ザフトも連合もよそ者でしかない。なにかあれば彼らは敵に回る。……だが、この事は、ラドル隊に話をしておく。地元の人と繋がりを保っていたラドル隊から言ってもらう方が良さだろう」

そう言うと、アスランはMSを降りた。あたしも続く。

「あ……ザラ隊長、どうしたんですか？ 作戦成功でしたね」

「……ああ。しかし、ぎりぎりだったそうじゃないか。お前、他の事に気を取られ過ぎだぞ。奇襲した意味がなくなるだろう」

「そうよ。雑魚は私達に任せてくれればよかつたのに」

「あ……すみません」

「だが、大成功だな。よくやった。シン、君の力だ」

「いえ、そんな。あ！ でもあれひどいですよ！ もうマジ死ぬか

「と思いました！」

「んー？ なんの事かな？」

「あんなに何も見えないなんて言ってなかったじゃないですか」

「そうか？ちゃんと聞いたぞ、データだけが頼りだって」

「いやあ、それはそうですね……」

「でもお前はやりきったろ？出来たじゃないか」

「それはそうですね……」

「さあ、戻るぞ。俺達の任務は終わりだ。帰ったら祝杯でも挙げよ

う。おごってやるぞ」

「はい！」

議長とのお茶会

ガルナハンを攻略したミネルバは、ジブラルタルより進軍したザフト軍によって解放された黒海沿岸都市の一つ、ディオキアに寄港した。

「今まで海だの基地だの山の中だのばかりだったから、こう言っきれいな街いいですね、ザラ隊長」

「ああ、そうだな」

「あ？ この曲って？」

「ああ、お前ら！ ラクス様がコンサートやってんぞ！」

シヨーンやヴィーノ達が駆けて行く。

「ご存知なかったんですか？ 御出になること」

「ああ…… ああまあいや……」

「ま、ちゃんと連絡取り合っている状況じゃなかったですね。きつとお二人とも」

「ああいや、まあうん……」

「ああ！」

ひっどーい！ 人にぶつかってあやまりもせず行っちゃうなんて！
これだから男は！

「す、すみません。誰かにぶつかられて……」

「ま、確かにここは危ないな。向こうへ行こう」

「はい」

そのままアスランはあたしの腰に手を回して歩いていこうとした。

「いいんですか？見なくて」

「え？ シンか。ああ、まあうん」

まあ、婚約者なら別にコンサート見なくても普段のファンに見せない普通の姿って奴を見てるだろうしね。

あたしたちは舞台の正面から、それほど人のいない横手に移動した。

「やっぱりなんか……変わられましたよねラクスさん」

メイリンが言う。

「いや！ ……あ……それはまあ、ちょっと……」

ラクス・クラインか……こうして見ているとただのアイドルと言う感じがする。曲がりなりにも一軍を率いた将には見えない。彼女は御輿だっただけなのか？

「なーに、お姉ちゃん、まるで睨む様に見ちゃって？」

「え？ ああ、確かに感じ変わったわね。でも、今のご時勢じゃこういう元気の出る感じの方がいいかもね」

恨む価値も、ないか……。

その日の午後、あたしたちミネルバのパイロットはディオキアの街を見下ろすホテルに呼ばれた。なんとデュランダル議長が来ている

というのだ！　タリア艦長とレイは先に行っているらしい。

ハイン・ヴェステンフルス　有名なフェイスのパイロットが案内してくれた。

「失礼します。お呼びになったミネルバのパイロット達です」

「やあ！久しぶりだね、アスラン」

「はい、議長」

「ああそれから……」

「ルナマリア・ホークであります」

「シ、シン・アスカです！」

「ゲイル・リバースです」

「シヨーン・コネリーです」

「君のことはよく覚えているよ」

ええ！？　あたし！？　そう言えば、オーブのカガリ代表に文句つけた時、議長もいたっけ。やばっ！

「このところは大活躍だそうじゃないか」

「ええ？」

「叙勲の申請もきていたね。結果は早晚手元に届くだろう」

「ああ…ありがとうございます！」

「それから君も。例のローエングリングートで素晴らしい活躍だったそうだね、シン君」

「いえ、そんな」

「アーモリーワンでの発進が初陣だったというのに、みんな大したものだ」

「あれはザラ隊長の作戦が凄かったんです。俺、いえ自分はただそ

れに従っただけで」

「この街が解放されたのも、君達があそこを落としてくれたおかげだ。いやあ、本当によくやってくれた」

「ありがとうございます！」

あたしたちは席に着き、お茶をご馳走になった。

「兎も角今は、世界中が実に複雑な状態だね」

「宇宙の方は今どうなってますの？月の地球軍などは」

「相変わらずだよ。時折小規模な戦闘はあるが、まあそれだけだ。

そして地上は地上で何がどうなっているのかさっぱり判らん。この辺りの都市のように連合に抵抗し我々に助けを求めてくる地域もあるし。一体何をやっているのかね、我々は」

「停戦、終戦に向けての動きはありませんの？」

「残念ながらね。連合側は何一つ譲歩しようとしない。戦争などしていただくはないが、それではこちらとしてもどうにもできんさ。いや、軍人の君達にする話ではないかもしれんがね。戦いを終わらせる、戦わない道を選ぶということは、戦うと決めるより遙かに難しいものさ、やはり」

「でも……」

「ん？」

。 シンが会話に口を出した

「あ……すみません」

「いや構わんよ。思うことがあったのなら遠慮なく言ってくれたまえ。実際、前線で戦う君達の意見は貴重だ。私もそれを聞きたくて君達に来てもらったようなものだし。さあ」

「……確かに戦わないようにすることは大切だと思います。でも敵の脅威がある時は仕方ありません。戦うべき時には戦わないと。何

「一つ自分たちすら守れません。普通に、平和に暮らしている人達は守られるべきです!」

「ルナマリア君はどうかね?」

「私もそう思います。かかる火の粉は掃わなきゃいけません。自衛のための戦いも否定するのなら、それは、自殺です。」

「……しかしそうやって、殺されたから殺して、殺したから殺されて、それでほんとに最後は平和になるのかと、以前言われたことがあります。私はその時答えることができませんでした。そして今もまだその答えを見つけられないまま、また戦場にいます」

アスランも話に加わる。

「そう、問題はそこだ。何故我々はこうまで戦い続けるのか。何故戦争はこうまでなくならないのか。戦争は嫌だといつの時代も人は叫び続けているのにね。君は何故だと思う?シン」

「え!それはやっぱり、いつの時代も身勝手に馬鹿な連中がいて、ブルーコスモスや大西洋連邦みたいに…違いますか?」

「いや、まあそうだね。それもある。誰かの持ち物が欲しい。自分たちと違う。憎い。怖い。間違っている。そんな理由で戦い続けているのも確かだ、人は。だが、もっとどうしようもない、救いようのない一面もあるのだよ、戦争には」

「え?」

「たとえばあの機体、ZGMF-2000グフイグナイトッド。ルナ君の愛機でもあるが、つい先頃、量産体制に入ったばかりだ。今は戦争中だからね。こうして新しい機体が次々と作られる。戦場ではミサイルが撃たれ、モビルスーツが撃たれる。様々なものが破壊されていく」

「……」

「故に工場では次々と新しい機体を作りミサイルを作り戦場へ送る。両軍ともね。生産ラインは要求に負われ追いつかないほどだ。その

一機、一体の価格を考えてみてくれたまえ。これをただ産業としてとらえるのなら、これほど回転がよく、また利益の上がるものはないだろう」

「えー！」

「議長そんなお話……」

「……でもそれは……」

「そう、ルナマリア君、戦争である以上それは当たり前。仕方ないことだ。しかし人というものは、それで儲かると解ると逆も考えるものさ。これも仕方のないことだね」

「いえ、私の言いたかった事はそうではなくて……」

「ふむ、何かね？」

「聞いたことがあります。昨今の巨大資本にとって全世界を巻き込んだ大戦争などと言う物は、悪夢だと。なぜなら現代の戦争は彼らの資産を徹底的に破壊し、良質な労働者と言う資源を戦争に取られてしまうのですから。資本主義の発達した現代、最も大きな消費は民需です。これを減退させる戦争は企業にとって悪夢に他なりません。そうなれば経済は後退するでしょう。現にそうなっています」

「ちよつとルナマリア君、来てくれたまえ！」

「え、は、はい」

議長はベランダの隅へ歩いていく。あたしもあわてて追いかける。

「ふふふ、ルナマリア君は賢いな」

「そう言う言い方、嫌いです。大人っぽくて」

「そうだな。気をつけよう」

議長は苦笑した。

「いいかね、政治家は、清濁併せ呑まねばいけない。これから私が話すのは、ある意味汚い話だ。秘密にしてくれたまえよ？」

「は、はい！」

「人と人が協力できる状態とはなんだと思うね？」

「お互いに協力すれば得になる事を持つ事ですか？」

「そうだ。その簡単な方法が、共通の敵を持つ事だ。これから皆の前で話す事は、私がやるうとする事は、倫理的には間違いかも知れないが、プラントを地球の仲間だと思ってもらうためには、プラントのためには必要な事だと私は信じる。どうか話を合わせてくれ給え」

「はい、いいですよ。でも、私に論破されるようじゃだめですよ」

「はつきり言う。気に入らん」

「どうも。気休めかもしれませんが、議長ならうまくやれますよ！」

「ありがとう。信じよう」

あたし達はみんなの所へ戻った。

「さて、さっきの続きだが、戦争が終われば兵器は要らない。それでは儲からない。だが戦争になれば自分たちは儲かるのだ。ならば戦争はそんな彼等にとっては是非ともやって欲しいこととなるのではないのかね？」

「そんな！」

「あれは敵だ、危険だ、戦おう、撃たれた、許せない、戦おう。人類の歴史にはずっとそう人々に叫び、常に産業として戦争を考え作ってきた者達がいるのだよ。自分たちに利益のためにね。今度のこの戦争の裏にも間違いなく彼等ロゴスがいるだろう」

「ロゴスと言うんですか？ そんな物があつたなんて！」

「彼等こそがあのブルーコスモスの母体でもあるのだからね」

「なんて事！ ロゴス……許せませんね！」

「だから難しいのはそこなのだ。彼等に踊らされている限り、プラントと地球はこれからも戦い続けていくだろう。できることならそれを何とかしたいのだがね。私も。だがそれこそ、何より本当に難

しいのだよ……」

ディオキアの休日

お茶会が終わり、あたしたちはこのホテルに泊まっていくよう勧められた。

「ほんとに、よろしいんですか？」

「ええ、休暇なんだし。議長のせっかくの御厚意ですもの。お言葉に甘えて今日はこちらでゆっくりさせていただきますいなさい。

確かにそれくらい働きはしてるわよ、あなた方は」

「そうさせていただけ。シンモルナマリアも。艦には俺が……」

「艦には私に戻ります。隊長もどうぞこちらで」

「いやそれは……」

「いや、艦には俺が残ろう、レイ。いやなに、こんな高級なホテルなんざ、何か起きそうで却って眠れん」

「でも、シヨーン……」

「それでも俺は皆より少しだが年上だ。年上の言うことは聞くもんだ。お前らにはこんな所に泊まるのもいい思い出なるかもしれない。気が咎めると言つなら、今度隊長に一杯おごってもらうさ。な、隊長」

「アスラン！」

「ん？」

あ、廊下の向こうから走ってくるのはラクス・クライン？

「あはは」

「ミィあ……」

「これはラクス・クライン。お疲れ様でした」

「ありがとうございます」

「あッ！」

ラクスはアスランに抱きついた！　いくら婚約者だからってこんな人前で！！

「ホテルに御出と聞いて急いで戻って参りましたのよ」

「な……ミー……アはあ……」

この女！　人にぶつかっておいて！

「今日のステージは？見てくださいました？」

「え？ああまあ……」

「本当に！？どうでしたでしょうか？」

「あ……ああええ……ま……」

「ふん」

「彼等にも今日はここに泊まってゆっくりするよう言ったところで
す」

「え？あ！」

ラクス・クラインも泊まるんだ。そりゃそつか、ここ、街で一番いいホテルだもんね。

「どうぞ久しぶりに二人で食事でもなさってください」

「ま〜！ほんとですよ！それは嬉しいですわ！アスラン、では早速席を」

「ああ、その前にちょっといいかな？アスラン」

「ん？」

議長とアスラン、ラクス・クラインは別の所へ行ってしまった。

あたしたちは部屋に案内された。
ビジネスホテルなんかとまったく違う部屋。広い！ベッドも広い。
二人は寝れそうな広さ。
広いだけじゃなくて年月を重ねた物だけが持つ空気。
もったいない、メイリンと一緒に泊まれたらよかつたな……
なんて思ってしまう

「ルナー」

あ、ゲイルが呼びに来た。

「みんなで夕食に行きましょう」

「いいわね！　こんなホテルの食事なんて楽しみ！」

ホテルのレストランではジビエ料理をお勧めされた。
プラントに住んでるあたし達にとって、まるで縁のなかった料理。
それが食べられる！　あたし達は迷うことなくジビエのコース料理
を選んだ。

前菜は生ハム&旬のフルーツだ。

「ねえ、なんで生ハムとメロンって一緒に食べるの？」

「それはね、ルナ。生ハムとメロンを一緒に食べると、メロンの青
臭さが気にならず、甘味も増し、生ハムの塩味も和らぐからよ。
栄養学的に見ても、この食べ合わせは理に適っていると言っわ」

「ゲイルって物知りねー」

「不思議な食べ合わせは、他にも、イチジクとサラミとか、洋ナシ
とゴルゴンゾーラチーズ、ペコリーノチーズの蜂蜜がけなんてのも
あるらしいわ。」

ま、あたしもほとんど耳学問だけどね」

と言ってゲイルはウインクして舌を出した。

その後も、ブリュターニユ産ウズラのフリット、バルサミコソース、サラダ添え、トンブ産うさぎのラグーのフェットチーネ、ダマ鹿のロースト、黒胡椒風味、と、次々運ばれてくる料理を満喫した。

お腹一杯になったあたしは幸せな気持ちで眠りに付いた。

「おはようございます、アスラン！ お目覚めですか？よろしければダイニングにご一緒と思ひまして」

翌朝、あたしはアスランを起こしに行った。昨夜は一緒に食べられなかったから、今朝は一緒に食事したいな。

「あああーあー、えつと…ええ？あ…」

「アスラン？」

「あ、ああ！」

「あ…」

え、ラクス・クライン！？ それにこの格好！

「ありがとう。でもどうぞお先にいらしてくださいな。アスランは後からわたくしと参りますわ」

アスランはラクス・クラインの後ろで

「ああ…」

とか呻いてる。情けない！

「え……ああの……え……あはい……………」

あたしもよくわからない返事をしてしまった。目の前で無常にも扉が閉まる。はう。

結局、ゲイルと食事をした。何を食べたかは、覚えてない……

ラウンジに降りていったらシンに会った。

「え？議長もう発たれたの？」

「ええ。お忙しい方だもの。昨日ああしてお話しできたのが不思議なくらいでしょ、ほんと」

「あ、まあ……………」

「はあ……………」

「……………ルナ、どうしたの？」

「別に」

「お前達、昨日のミネルバのひよっ子だろ？もう一人のフェイスの奴はどうした？」

あ、昨日案内してもらったフェイスの……

「失礼いたしました、おはようございます」

「あッ……え……」

「ふふ」

「ザラ隊長でしたら、まだお部屋だと……………あ……………」

噂をすれば……………アスランはラクス・クラインといちやつきながら降

りてきた。

「なるほどね。分かった分かった、サンキュウ。おはようございます、ラクス様」

「あーら、おはようございます」

「昨日はお疲れ様でした。基地の兵士達もたいそう喜んでおりましたね。これでまた士気も上がることでしょう」

「ハイネさんも楽しんでいただけましたか？」

「はい、それはもう。昨日はゴタゴタしててまともに挨拶も出来なかつたな」

「あ……」

「特務隊、ハイネ・ヴェステンフルスだ。よろしくな、アスラン」

「こちらこそ。アスラン・ザラです」

「知ってるよ、有名人」

「ん？」

「復隊したって聞いたのは最近だけだな。前はクルーゼ隊にいたんだろ？」

「あはい」

「俺は大戦の時はホーキンス隊でね。ヤキン・ドゥーエでは擦れ違つたかな？」

「ラクス様。ラクス様には今日の打ち合わせが御座いますので申し訳ありませんがあちらで」

「ええ〜！」

「お願いします」

「は〜い、仕方ありませんわね。ではアスラン、また後ほど」

「ああ、はい……」

ラクス・クラインは去って行った。

「仲いいんだな、けっこう」

「え？ああいやあそんなことは……」

「いいじゃないの、仲いいってことはいいことよ？うん」

「はいまあ……」

「で、この5人と昨日の右頬に傷のあるやつ全部で6人が、ミネルバのパイロットは」

「え？はい」

「インパルス、ガイア、グフ、ザクファントム、セイバー、そしてあいつがザクウォーリアかあ」

「ん？」

「はい」

「で、お前フェイスだろ？艦長も」

「はあ……」

「戦力としては十分だよなあ。なのに何で俺にそんな艦に行けと言うかね、議長は」

「え！？」

「ミネルバに乗られるんですか！？」

「ま、そういうことだ。休暇明けから配属さ。艦の方には後で着任の挨拶に行くが、なんか面倒くさそうだよな、フェイスが三人つては」

「いえあの……」

「ま、いいさ。現場はとにかく走るだけだ。立場の違う人間には見えてるものも違うつてね。とにかくよくしくな。議長期待のミネルバだ。なんとか応えてみせようぜ」

「はい、よろしく願います」

「「よろしく願います！」」

その後しばらくして、アスランと一緒にラクス・クラインがヘリコプターで去るのを見送った。

「さ、どうしよっかなあ今日はこれから」
「ん？どうって？」
「街に出たい気もするけどションにも悪いから艦に戻るっかなー」
「せっかくの休暇だ。のんびりしてくればいい。艦には俺が戻るから気にしなくていいぞ」
「そっか！隊長はもういいですもんねー。ラクス様と十分！ゆっくりされて！」
「えー！」
「そうですね、どうせならラクス様の護衛に就いて差し上げれば良かったのに」
「ルナマリア！」
「隊長はフェイスですもん。そうされたって問題はないでしょ？」
「ちよつと待て！ルナマリア！」
「ふー」
「みんな、先に行ってくれ」
「あ、はい」
「叩きます？」
「はあ…今朝のことは、俺にも落ち度があることだから言い訳はしたくないが。君は誤解しているし、それによってそういう態度を取られるのは困る」
「誤解……」
「……」
「誤解も何もないと思いますけど。分かりました。以後気をつけます。ラクス様がいらしている時は！」
「いやだから……」
「大丈夫です。お二人のことは私だってちゃんと理解してるつもりですから」
「だから！目が覚めて気がついたらいたんだってば！」
「はい。そう言う関係ですものね。婚約者」
「もっ……はあ……」

結局アスランは艦に帰っていった。

あたしも艦に帰ってシヨーンやゲイルとこの街をぶらついた。メイリンはヴィーノやヨウランと出かけるらしい。姉離れて事かな。少し寂しい気もする。

「こうして普通の格好をして街の人の会話を聞いてみる。おもしろいぞ」

あたしたちは昼間からやっていたレストラン『AVANTI』のウェイティングバーに入った。

「マスター！ ヴェスパーを頼む。ご婦人にはダイキリを」

シヨーンが頼んでくれたカクテルを飲みながら聞き耳を立てる。

「いやーしかし驚いたよ。プラントの議長が来てくれるとはよ」

「ああ、なんか同じようにこの辺の街、少し回っていくんだって。ラクス・クラインも」

「前の戦争ん時は敵だ敵だって戦ってさ、それが今じゃこうだもんな。ほんと分からねえもんさ」

「コーディネイターなんてやっぱりちよっとおっかない気もするけどさあ、あの乱暴者の連合軍に比べたら全然マシだよ。ちゃんとして紳士じゃないか」

「プラント、評判いい見たいね」

「ああ、きちんと行儀よくしてるみたいだな。それに比べて連合軍はかなり行動が乱暴だったらしいな。統制が取れていないのかも知れん。

それから、ラクス・クラインの名をこんな所の人も知っているって

事もわかる」

カクテルを飲み終わると、あたしたちはバーを後にした。

「ごちそうさま、マスター」

「いってらっしゃいませ！」

なかなかいい雰囲気だった。面白い話も聞けたし。また、来て見ないな。ここに。

乱入者

次の日、言葉通り、ハイネさんはミネルバにやってきた。

「シヨーン・コネリーです」

「ああ、ザクウォーリアね。ハイネ・ヴェステンフルスだ。よろしく。しっかしさすがに最新鋭だなあミネルバは。な？ナス力級とは大違いだぜ」

「ええ、まあそうですね」

「ヴェステンフルス隊長は今まではナス力級に？」

「ハイネでいいよ。そんな堅っ苦しい。ザフトのパイロットはそれが基本だろ？君はルナマリアだったね？」

「ああはい」

ハイネさんってやっぱり気さくな人だ。よかった！

「俺は今まで軍本部だよ。この間の開戦時の防衛戦にも出たぜ？」

「隊長……あの俺達は……」

「ヴェステンフルス隊長の方が先任だ、シン」

「ハイネ」

「あ……」

「あ、でも何？お前隊長って呼ばれてんの？」

「ああいえまあ……はい」

「戦闘指揮を執られますので我々がそう」

「えー。んー、いやでもさあ、そうやって壁作って仲間はずれにするのはあんま良くないんじゃないの？」

「……あ……」

「俺達ザフトのモビルスーツパイロットは戦場へ出ればみんな同じだろ？フェイスだろうが赤服だろうが緑だろうが、命令通りにワー

ワ―群れなきや

戦えない地球軍のアホ共とは違うだろ？」

「はい」

「だからみんな同じでいいんだよ。あ、それとも何？出戻りだからつていじめてんのか！？」

「え？」

「あ、いやあ……」

「いえ、そんなことは……」

「なら、隊長なんて呼ぶなよ？お前もお前だなアスラン。何で名前で呼べって言わないの」

「すみません」

ちよつと残念な気もする。実は意識してアスランと二人だけの時は「アスラン」って呼んでただけ。みんなが「アスラン」って呼んじゃうとなー。

「ま、今日からこのメンバーが仲間ってことだ。息合わせてばっちり行こうぜ！」

「はい！」

悪い知らせが入った。スエズに連合軍の増援、そしてそれは黒海に来るらしい。

そして……

「ええ！？オーブ!？」

「そ、援軍、オーブだって」

「そんな……なんであの国が……」

「もう信じらんないわよねーほんと、こんなところまで。でも、今は地球軍だもんね、そゆこともあるか」

「……」

「しかたなかるうな。一度連合に付くと決めたからには。でないと、オーブが攻められる。実体験もあるしな」

「シン、割り切れ。でないとお前が死ぬぞ」

「レイ……」

「……シン、もしオーブ軍が来たら、ミネルバを守ることに専念していいわよ。ハイネさんも来たんだし、私達で、オーブ軍は攻撃するから」

「……いや、俺がやるよ。オーブ軍なんか全部、俺が沈めてやる！」
そう言うと、シンはお盆を持って去って行った。

「どうしてシンが、あえて自分の手でオーブ軍を沈めると言った意味がわかるか」

二人きりになった時、ふいにレイが聞いてきた。

「さあ？ 前の時はオーブの理念とやらで家族を殺され、今度はその理念を破る、その身勝手さに怒ったんじゃないの？」

「もし理念を守ればまた国を焼くかも知れないと、シンもわかっているんだ。」

もし誰かの手でオーブ軍が滅ぼされれば、シンはどうしてもその者に対する恨みを禁じえないかもしれない。だが、自分が積極的に動いてオーブ軍を滅ぼせば、祖国の敵は自分自身、誰も恨む筋はない。そう考えたのだ。彼はそういう男だ」

「そう考えるのには、なにか根拠があるの？」

「俺の勝手な解釈だ。真実かどうかは知らん。……それにしても」

レイは苦笑したように見えた。

「それにしても、俺も口数が多くなった物だ」

あたしは決めた。シンだけに、辛い思いはさせない。

ダーダネルス海峡まであと少しの位置でコンデイションレッド発令がされた。

「シンとハイネ、俺とルナはとりあえず交代で敵MSの迎撃。レイ、シヨーン、ゲイルは飛べない以上対空砲火に専念してくれ、とにかくミネルバに敵を近づけないよう頑張ろう」

「はい！ アスラン」

「そうそう！ いい感じになってきたじゃないの」

「ハイネ・ヴェステンフルス、グフ、行くぜ！」

「シン・アスカ、インパルス、行きます！」

ハイネさんはテンペストを抜くと、そのリーチを生かして敵を切り裂いていく。

ああ言う戦い方もあるんだ……

シンもいつも通り、ビームライフルで敵の数を減らしていく。

『タンホイザー起動。照準、敵護衛艦群。プライマリ兵装バンクコンタクト。出力定格。セーフティ解除』

オーブ軍には空母もいる。それごと掃射する手だ。うまくいったほしい。空母を叩いたら、楽になる。

その時、上空からタンホイザーが撃たれ、爆発した

「あれはアークエンジェルにフリーダム！？ キラか！ なんで！」

「ブリッジ！ 被害は！？」

『乗員5名死亡！ 更に負傷者あり！』

「うづうううー！」

言葉もないあたしたちが見ている前で、アークエンジェルから一機のMSが発進した。

「私は、オーブ連合首長国代表、カガリ・ユラ・アスハ！」

「「え！？」」

「カガリ！？」

「オーブ軍、直ちに戦闘を停止せよ！ 軍を退け！ 現在、訳あって国もとを離れてはいるが、このウズミ・ナラ・アスハの子、カガリ・ユラ・アスハが、オーブ連合首長国の代表首長であることに変わりない！ カガリその名において命ずる！ オーブ軍はその理念にそぐわぬこの戦闘を直ちに停止し、軍を退け！」

「まったく……何がどうなってるんだか。まさか、このままオーブが退くなんてことは……」

「艦長。動きがあったら俺とルナも出ますよ？ いいですね？」

「ええ、お願い」

静まった戦場に凜とした声が響く。

『オーブ全軍に告ぐ、アレが本物であろうとなかろうと我らには関係ない！ 祖国の為を思うならば、今は理念を放棄する屈辱を受けてでも戦わねばならない！ これはオーブ生き残りをかけた戦いだ！ 諸君らの健闘を期待する！』

『聞いてのとおりだ。全軍、攻撃開始！』

重々しい声と共に、アーケエンジェル、フリーダム、そしてカガリ・ユラ・アスハと名乗ったMSに攻撃が開始される！

「オーブ軍！何をする！私は……」

それと同時に横合いから地球軍がミネルバを狙いにやってくる！

『モビルスーツ隊、全機発進せよ！』

「ルナマリア・ホーク、グフ、出るわよ！」

ぶつかりあう想い

「カオスがいるのか。カオスは俺が抑える！ ハイネ、シン、ルナ！ 十分に連携して戦え！ オーブ軍は攻められない限りまだこちらから手を出すな！ 最後に各員、アークエンジェルとフリーダムがオーブ代表を拉致して逃走したことは知っているな？ もしあの勢力の人員が前大戦以来変わっていないなら奴らは、こちらを殺そうとはしない、無視してかまわん！ ただし、武装を破壊されること及びミネルバの武装付近にいる人員達は二次災害に十分注意してくれ。以上だ！」

「了解！」

『オーブ軍、モビルスーツ各隊は地球軍と共にミネルバへの攻撃を再開せよ！ もう敵に陽電子砲はない！』

オーブ軍もか！

「オーブ軍は俺が引き受ける！」

「シン！」

「……わかったわ。だけど、あたしも混ぜてもらおうよ」

「ルナ……」

「仲間でしょ？」

「わかった！」

「ミネルバ及び各員！ アビス確認！ 下からの攻撃に気をつける！」

「了解！」

「ハイネ！ 連携してまずカオスをやろう！」

「OK！ アスラン！」

「ルナ！ ミネルバに4機向かった！ そっちに追い込む！」

「了解！」

「ちょこまかと！」

敵はMA形態、MS形態と頻繁に変形する！

ドラウプニル！ ばら撒く！ 一機被弾！

一機ずつ確実に行くしかないか！ スレイヤーウィップを胴体に叩きつける！

シンも一機落とした。後一機！

「うわぁー！ なんだこいつ！」

「何？」

シンのインパルスが！ 上空から舞い降りてきたフリーダムに右腕を切り落とされた！

「よくも……フリーダム！ 父さんと ミネルバの乗組員の仇！」

「え？ 仇……？」

突然棒立ちになったフリーダム。だけど容赦はしない！ 両腕からのスレイヤーウィップ！

とっさにフリーダムは動き、ビーム砲を破壊しただけで終わった。

くそう！ フリーダムは退いていった。

「何なのよ！ あんた達はーーーー！！！」

……結局。海峡の防衛には成功した物の、尊い犠牲が出た。そのすべてはフリーダムにタンホイザーを撃たれて生じた物だった。タンホイザーの発射寸前だった事が、艦首部の被害を大きくしたのだ。

最終的に死者10名、更に重傷者3名。彼らは後送された。

「あいつらのせいだ……」

「ん！」

「あいつらが変な乱入して来なきゃ……大体何だよあいつら！ 戦闘をやめるとか。あれがほんとにアークエンジェルとフリーダム！？ ほんとに何やってんだよオーブは！ 馬鹿なんじゃないの？」

「私の父さんもフリーダムに殺されたわ。宇宙を何時間も漂って、酸欠だった。でも、クライン派は、フリーダムは人の命を奪わないとか宣伝していたわ。所詮綺麗事言ってるだけなのよ！ あいつらは！」

「くッ！」

アスランにあたるのは筋違いだと分かっている。アスランも苦しいと思う。知り合いがこんな事をしてかして。廊下でアスランが壁を殴りつけてるのを見てしまった。

「くそう！ 戦争はヒーローごっこじゃないんだぞ！ キラ！」

アスランは泣いていた。あたしはそつとそこを離れた。

翌朝、セイバーが離艦していった。その前に、あたしは艦長に呼ばれていた。

そこであたしはアスランがアークエンジェルと接触するために離艦

する事を知らされた。

そして、その様子を探る事も命じられたのだった……

アスランが泊まるホテルの部屋を監視できるホテルの部屋を取る。

こんなことしてるとまるでスパイみたいだ。

ザフトに連絡すると、盗聴の手はずを整えてくれた。

ずっと見張っているのも疲れる物だ……

翌朝、動きがあった！ あたしも後を追いかける！ 小型ヘリコプターで待ち合わせの場所から離れた場所に降り、歩いて近くまで行って、集音機の準備をする。

「キラ。カガリ」

「アスラン……」

「どういうことだ！アスラン！お前……」

「……」

「ずっと、ずっと心配していたんだぞ！あんなことになっちゃって連絡も取れなかったけど。でも……なんで！なんでまたザフトに戻ったりなんかしたんだ！」

「その方がいいと思ったからだ。あの時は。自分の為にも、オーブの為に」

「そんな……何がオーブの！」

「カガリ！」

「あう……キラ……あ……」

「あれは君の機体？」

「ああ」

「じゃあこの間の戦闘……」

「ああ、俺もいた。今ミネルバに乗ってるからな」

あれが、キラ・ヤマト。父さんの仇！

「あ……」

「お前を見て話そうとした。でも通じなくて……。だが何故あんなことをした！あんな馬鹿なことを！」

「あ……」

「おかげで戦場は混乱し、お前のせいでミネルバにも要らぬ犠牲も出た」

「馬鹿なこと……？あれは、あの時ザフトが戦おうとしていたのはオーブ軍だったんだぞ！ 私達はそれを……！」

「ミネルバの乗組員を殺すのはかまわないのか？ 陽電子砲を破壊されてどれだけの乗組員が死んだと思っっている！」

それにあそこで君が出て素直にオーブが撤退するとも思っただか！ オーブの主力がここにいるなら、連合を裏切れば簡単にオーブはまた焼かれるだろうに、オーブが連合を裏切れるはずがないだろう！」

「うう……」

「君がしなけりゃいけなかったのはそんなことじゃないだろ！戦場に出てあんなことを言う前に、オーブを同盟になんか参加させるべきじゃなかったんだ！……まさか、出兵の強要を想像もしなかった訳でもないだろう？ 2年前、オーブのマストライバーの使用を強引に求めたのも、地球連合だ。……オーブを焼かないために、他国を攻める選択をしたのだろう、一度」

「それは……」

あたしの中のカガリ株が急降下した。やっぱり馬鹿姫だったか。

「カガリは、間違ってしまったことを分かっている！ あの時はずかに間違った、でもアークエンジェルに来て分かってくれたんだ。他の国を撃つ事はやはりいけないって事、それを何とかしたいと思ったからカガリは……」

「何とかしたいと思って、何をしたんだ？」

「まさか、間違いを分かるのにこんなに時間がかかった訳でもないだろう。それから、何をしていた。無為に時を過ごしていただけか。オーブ軍がミネルバを攻撃するまで。オーブが連合に出兵を強制されても、オーブ軍が出撃しても、オーブ軍が連合軍と合流しても、何もせず」

「もう、やめてくれ。カガリも混乱してる」

「まあ。いまさら言っても仕方がないか。でも、よく考えてくれよ、カガリ」

「でもそれで、君が今はまたザフト軍だっていうなら、これからどうするの？ 僕達を探していたのはなぜ？」

「探していたのはもうあんなことはやめさせたいと思ったからだよ。俺がザフト軍兵士としての義務を果たす羽目になる前にああいう行動は止めてもらいたいんだ。ユニウス・セブンのことが問題なのはわかってるけどね、その後の混乱は、どう見たって連合が悪いよ。抑えようとすれば抑えられた民間の暴動を煽って、開戦に持ち込んだんだから。……まあそんなことは今言っても仕方がない。とにかく今重要なのはこの戦争を早期に終わらせることだと俺は思ってる。早く終わらせるために俺の出来る事をやるうとも。でも君達の行動は、ただ状況を混乱させているだけだ。まるで戦争を長引かせたいかのようだね」

「本当にそう？」

「……？」

「プラントは本当にそう思っているの？ あのデュランダル議長って人は、戦争を早く終わらせて、平和な世界にしたいって」

「俺はそう信じるよ」

「じゃあ、あのラクス・クラインは？」

「……ああ、彼女か」

「あのプラントにいるラクスはなんなの？ そして、何で本物の彼

女はコーディネイターに殺されそうになるの？」

「あのラクスの替え玉は混乱を抑えるための一手段だと思うが。なにしろ議長以上の影響力を持ちながらも終戦の立役者本人はオーブに引っ込んでしまったからな。まあ俺も人の事は言えんが。その是非はともかく民衆の混乱の収束には一定の成果は上げているようだな。」

ああ！ 驚くべき内容だけど、なんかすんなり納得できた。ラクスクラインが何か変わったと思ったのも道理だ。あの議長ならやりそうな事だ。

「……で、殺されそうになったというのは？」

「オーブで僕らは、コーディネーターの特殊部隊とモビルスーツに襲撃された。狙いはラクスだった。だからボクはまたフリーダムに乗ったんだ」

「……何でフリーダムを保管してたんだ？ ユニウス条約違反の？」「彼女もみんなも、もうだれも死なせたくなかったから。彼女は誰に、なんで狙われなきゃならないんだ？ それがはつきりするまでは、僕はプラントを信じられない」

「キラ、俺たちの手は血で汚れてるんだ。俺たちを恨んでる人間なんてそこらじゅうに居るんだよ。宇宙にも、地球にも、モビルスーツを持ち出してまで恨みを晴らそうという人間はね。まあ、君たちが信じたくないのならプラントを無理に信じなくてもいいけど、もう戦場には出てこないでほしい。今の俺はザフト軍兵士だ。国と仲間の安全の為に義務を果たさなきゃいけないから」

「じゃあ、お前は戻らないのか？ アークエンジェルにも、オーブにも！」

「オーブが、今まで通りの国であってくれさえすれば、行く道は同じはずだ。だから条約を早く何とかしてオーブを下がらせろ」

「アスラン！」

「俺は復隊したんだ！今更戻れない」

「でもそれじゃあ、君はこれからもザフトで、またずっと連合と戦っていくっていうの？」

「仲間を守るために。昔、お前が俺に言った言葉だな」

「じゃあこの間みたいにおーブとも？」

「攻撃されるなら、しかたないじゃないか。これも、昔お前に言われた言葉だな」

「……」

「ほんとに嫌なんだ、こんなことは。俺もオーブと戦いたくない。戦わせないでくれ。お願いだから」

「……でも、どうやれば……」

「カガリ、オーブにいて俺を感じた事だが、前大戦の後でもアスハ家を慕う物は民衆の中に大勢いる。

逆クーデターでもなんでもして、力づくでも実権をアスハ家に取り戻せ！ お前が覚悟を決めれば、知恵を貸し、協力してくれる者はアークエンジェルにもオーブにもいるはずだ。お前がオーブの実権を取り戻せば、俺もコネを総動員してザフトを動かして連合からの圧力を跳ね返す事もできる！」

「……あたしに、できるだろうか？」

「できる！ 世界中の誰が否定しようとな俺が肯定してやる！ お前はオーブの獅子の子だろう！」

「……キラ、力を貸してくれるか？」

「……カガリがそう決めたなら」

「ありがとう、ありがとう……」

「じゃあ、俺は行くよ。派遣されているオーブの艦隊の事は……すまない。攻撃されれば反撃せざるを得ない」

「……くっ……キラ、私たちも急いで帰るぞ！ マリュー艦長やバルトフェルドさんに相談しなきゃ！」

「カガリ！」

「なんだ、アスラン」

「頑張れ！」

あ……アスランはセイバーに乗って去り、オーブの代表も去って行った。

何？ アスランでラクス・クラインと婚約者じゃなかったの？ 今の様子じゃオーブの代表と恋仲って感じ……あたしは混乱した。

クレタ沖の死闘

あたしがミネルバに帰ろうとすると、なぜか出航したと言う。このへりじゃ追えないし、休暇中と言う事になってる任務がばれる。あたしはおとなしくミネルバの帰りを待つ事にした。

ミネルバが帰港してから、あたしはいかにもへりでの飛行を楽しんできたかのように、ミネルバへ帰った。

「シヨーン、なんなの？ 何があったの？ この暗い雰囲気」

「ああ、ルナか。見なくてよかったよ。ロドニアに連合が使ってたらしいラボがあったんだ。連合のエクステンデット、ルナも聞いているだろう。遺伝子操作を忌み嫌う連合、ブルーコスモスが薬やその他の様々な手段を使って作り上げている生きた兵器。戦うためだけの人間……そのラボはその実験、製造施設だったんだ。内乱があったらしくてな。子供の死体がごろごろしてた。レイも体調崩れしちゃったぐらいだ。ああ、今は復調したみたいだが」

「レイが！？ でも、コーディネイターは自然に逆らった間違った存在とか言っておきながら、そう言うのはいいって言うの？ 連合は？ おかしくない？」

「確かにな。まさに人権蹂躪も極まれりだ。負けられないな。そんな相手には」

「ええ！」

「エクステンデットの実物も一人、保護されてる」

「え？ほんと？」

「ああ、今医務室で寝ているよ。アビスのパイロットだ。アビスも取り戻した」

「ロドニアのラボにいた訳？」

「いや、なんだか知らんがたった一機で来たんだ。施設を破壊する

特殊な装備を持っていたかもしねなかったからな、シンとアスランでなんとか爆散させずに取り押さえた」

「よくできたわね。危くないの？」

「それがな」。やっぱり記憶とか精神とかいじられてるぽいな。

意識を取り戻したら『母さんを守るんだ』とか言っただけで、艦長を見ると、『母さん！』とか言っただけで抱きついてな。艦長があやしたら、おとなしくなってるな」

「そうなんだ……艦長は今はどこに？」

「艦長室で休んでいるよ」

「ありがと」

……

「指示されたものです。ご報告が遅れて申し訳ありませんでした」

「いいのよ。騒ぎばかりあって、私もとてもそんな状況じゃなかったもの。悪かったわね、スパイみたいな真似をさせて」

「いえ、艦長もフェイスというお立場ですので。その辺りのことは理解しているつもりです」

「ふふ」

「でもあの……」

「え？」

「できませんでしたら少し質問をお許しただけですでしょうか？」

「当然の思いよね。いいわよ、答えられるものには答えましょう」

「ありがとうございます。アスラン・ザラが先の戦争終盤ではザフトを脱走し、やはり地球軍を脱走したアークエンジェルと共に両軍と戦ったというのは既に知られている話です」

「ええそうですね。本人もそのことを隠そうとはしないわ」

「しかし、そのことも承知の上でデュランダル議長自らが復隊を認め、フェイスとされたということも聞いています」

「ええ」

「ですが、今回のことは…あの、そんな彼に未だ何かの嫌疑がある、ということなのでしょうか？ 私達はフェイスであること、また議長にも特に信任されている方ということでの指示にも従っています。ですがそれがもし……」

「そういうことではないわ、ルナマリア」

「え……」

「貴女がそう思ってしまうのも無理はないけど、今回に関しては目的はおそらくアークエンジェルのことだけよ」

「あ……」

「彼が実に真面目で正義感溢れる良い人間だということは私も疑ってないわ。スパイであるとか裏切るとかそういうことはないでしょう。そんなふうには誰も思ってないでしょうし」

「はい！ 会話を聞いた限りでは、そんな様子は一向に見られませんでした！」

「でも今のあの、アークエンジェルの方はどうかしらね」

「あ……」

「確かに前の大戦時にはラクス・クラインと共に暴走する両軍と戦って戦争を止めた艦だけど。でも今は？ オーブが連合の陣営に入ろうとしたら突然現れて国家元首を攫い、そして先日のあれでしょ？」

「はい」

「何を考えて何をしようとしているのか全く解らない。どうしたって今知りたいのはそれでしょう」

「はい」

「アスランもそう言って艦を離れたのだけねど。でも彼はまだあの艦のクルーのことを信じているわ。オーブのことも。ほんとは戦いたくはないんでしょう」

「ああ……」

「だからそういうことだと思っておいてもらいたいんだけど。いい？」

「あはい。でしたら私もあの……」

「とにかくご苦労様。この件はこれで終了よ。いいわね?」

「はい」

「モニターしていた内容もこの部屋を出たら忘れてしまっただい」

「了解しました。では、失礼します」

よかった。もしそう思われていても、盗聴した会話を聞けば、きっとわかってくれるはず!

アークエンジェルか……カガリさんの幸運を祈ろう。

ミネルバはディオキアを出航、ボスポラス海峡を抜けマルマラ海を南下、ダーダネルス海峡を抜けエーゲ海に出、ジブラルタルに向かう。

食堂を見ると、アスランとシンが深刻な顔をしていた。やっぱりオーブ軍とは戦いたくない物ね。

『コンディションレッド発令!コンディションレッド発令!パイロットは搭乗機にて待機せよ。繰り返しパイロットは搭乗機にて待機せよ』

あ、振り向いたアスランと目が合っちゃった。見つめてたのばれちゃった? ちょっと恥ずかしい!

「聞いてくれ! まだ確認されていないが地球軍の空母がいるはずだ! そいつを潰せばオーブ軍は退くかも知れない! カオスカウインダムが出てきたら、可能なら手負いにして後を付けるんだ!」

「了解」

さすがアスラン！ 策を考えていたのね！

『ハイネ機、ルナマリア機、インパルス、セイバー、発進願います』

さあ、行くわよ！

気負いこんだところにメイリンが言ってきた。

『モビルスーツ、発進停止してください！』

あらら、なに？ ！ 衝撃が走る！ 被弾した！？

『2時方向上空にオーブ軍ムラサメ9！ ハイネ機、ルナマリア機、インパルス、セイバー、改めて発進願います！』

今度こそ！ あたしたちは大空に飛び立った！

2時方向のムラサメ9機をあつという間に駆逐する！

『右舷後方、上空よりムラサメ12！』

ミネルバも危ない！ さつさと連合軍空母を見つけないと ！

「アスラン！ カオスをこちらに追い込んでください！」

「わかった！」

あたしはカオスの死角へ死角へと移動する！

アスラン、それにシンも加わりカオスがこちらにやってくる！

今だ！ 急上昇してカオスに正対！ スレイヤーウィップを機動兵

装ポッドに叩き込む！ 爆発！ 強力な推進力を失ったカオスは下に落ちて行く。

「シン！ カオスの後をつけて！ 連合軍の空母を叩くのは任せろわ！」

「……サンキュー！」

「さあ、俺たちはひたすら防衛すつぞ！」

すでに右舷からのムラサメ数機を落としたハイネさんが言う。

「了解！」

「行くぞ！ 今度こそ！ はあああッ！！！」

あぶない！ 一機のムラサメに突破される！ ミネルバのブリッジに向かっている！

「させるか……！」

盾を構えて上空から突っ込む！ ムラサメは盾のスパイクに貫かれ爆散する！

ふう、危なかった！

さあ、次！

その時、ミネルバに向かうオーブのMS隊が頭上からの光に貫かれた。

『オーブ軍！ ただちに戦闘を停止して軍を退け！ オーブはこんな

戦いをしてはいけない！ これでは何も守れはしない！地球軍の言いなりになるな！ オーブの理念を思い出せ！それなくして何のため軍か！」

またあのお姫様か！ アスランに説得されたんじゃないかなかったの！？
オーブ軍からも通信が流れる。

『お前たちの戦う意味を思い出せ！ 理念か！ ならどうして理念を守る！ 愛するもののためじゃないのか！

僕はオーブが、あの国が、あの家族の暮らす国が好きだから此処にいる！ 理念はそれを守るための物だ！ 国が守れないなら肥溜めに捨ててしまえ！」

『こちらに敵対する確たる意志はなくとも本艦は前回あの艦の介入によって甚大なる被害を被った。敵艦と認識して対応！』

「ちょっと待ってください！ 艦長！ 手を出されない限りこの状況で敵を増やす事もない！」

アスランが叫ぶとフリーダムに向かっていく！

「キラ！ なんでまた来た！ 来るなと言っただろう！」

「でもカガリは、今泣いているんだ！」

「え！？」

「こんなことになるのが嫌で、今泣いているんだぞ！何故君はそれが分からない！ なのにこの戦闘もこの犠牲も仕方がないことだつて、全てオーブとカガリのせいだつて、そう言っただけで君は討つのか！
今カガリが守ろうとしているものを！」

「討つって何をだ！ 勝手に俺が言った言葉を変えるんじゃない！
攻撃されてるのを守っただけだと言っているだけだろが！ よし、

そうまで言うのなら、ミネルバはここを突破したいただけだ！ これから防御のみに徹する！ お前らがオーブ軍を止めて見せる！」

！ インパルスが帰投してきた！

「シン！ 地球軍空母は！」

「やりました！ 沈めましたよ、アスラン！」

「ミネルバ！ シンが地球軍空母を沈めた！」

『よくやったわ！ シン！』

『オーブ軍に告ぐ！ 地球軍空母は沈めた。軍を退かれたし！』

あたしたちの誰もがオーブ軍が退く事を期待した。

だけど返って来たのは

『オーブ全軍はミネルバとアークエンジェルを攻撃せよ。繰り返す、オーブ全軍はミネルバとアークエンジェルを攻撃せよ！』

非情な言葉だった。

『やめる！あの艦を討つ理由がオーブのどこにある！ 討ってはならない！ 自身の敵ではないものを！ オーブは討ってはならない！』

『理由はある！ 連合の敵はオーブの敵だ！ なら、あの艦はオーブの敵だ！ たとえかつてオーブを蹂躪したとてオーブを復興させたのは連合だ！ だったらその借りは此処で返さなきゃならない！ ミネルバを撃沈しなければ、連合は到底納得しない！ コーディ

ネイターを受け入れようとする勢力に対して牙を剥きその武力は内側　オーブに向かつて暴走するだろう。我が国でその恐ろしさを最も知る人間は　この僕だ！　だから今はミネルバを討て！　オーブの明日の為に！』

「ちくしょー！　ここまでやってもだめなのかよ！　ミネルバ！　フォースシルエットを！」

『了解しました。フォースシルエット、射出！　デュートリオンビーム、照射！』

「シン、露払いするわ！　オーブ軍空母に降伏を勧告して！」
「わかつてる！」

すでにオーブ軍のモビルスーツはミネルバ上空から駆逐されていた。それでもオーブ軍は戦い続けていた。

あたしたちはオーブ空母を守っているモビルスーツを叩き落した！　シンが空母に降り、ブリッジに対艦刀を突きつける！

「降伏しろ！　でなければ退け！」

『私はオーブ代表代行、ユウナ・ロマ・セイランだ。申し出に感謝する。だが！　我々はオーブ軍人だ。我々は諦めない。友軍を見捨てない。国民は我々を信じている。ならばその信頼に応えなければならぬ。そう誓ったのだ！

ここでおめおめ言いなりになってオーブ国民の、そして諸国からの信頼を失うわけには行かない！　殺りたければ殺りたまえ！　君は君の義務を果たせ！』

凜とした声が告げる。同時に空母が増速して未だミサイルを放ちながらミネルバを目指す！

「シン、もう十分だ。俺が沈める！」

「いや、アスラン、俺が！ うああああー！」

シンが泣きながら甲板に対艦刀を突き刺して切り裂く！

オーブ空母は、ようやく動きを止めた。甲板から爆発と炎と煙を上げながら、沈んで行く。

ミネルバは突破に成功した。オーブ軍を引き離してゆく。それを見た残りのオーブ軍は、軍をまとめて救助作業に移った。アークエンジェルもいつの間にか消えていた。

帰艦したあたしたちは、まだ煙が立ち上る、オーブ軍の空母が沈んだ方角へ向かって敬礼をした。

あたしの頬に、皆の頬に、涙が流れていた。

示される世界

クレタ海での激戦から逃れる事に成功したミネルバは、ラコニア湾に身を潜め、修理を行い補給を待っていた。

モビルスーツも、ザクウォーリアが大破、ファントムが中破の損害を出した。

「ショーン、ゲイル、お見舞いに来たわよ！」

「ルナ、やあ、面目ない。しばらくモビルスーツには乗れん。と言っても乗るモビルスーツがぶっ壊れちまったけどな」

「ルナー！ もう痛くて散々よ」

「でも、元気そうでよかった。大破って聞いた時は心臓止まるかと思っただ」

「アスランとシンはどうしてる？」

「どうして？」

「いや、あいつらだけ見舞いに来ないから、気になってな」

優しいなあ。ショーンって。自分が怪我してるのに人の事まで気遣って。

「あー。オーブ軍と激戦繰り広げたからね。オーブに縁あるでしょう、二人とも。ちょっと鬱に入っただみたくて部屋に閉じこもってる」

「そうか。ま、無理もないかな」

「そうね。シンが空母を沈めた時の話は聞いてるわ。辛いわよね」「うん……」

隣では艦長がエクステンデットの様子を見に来ていた。エクステンデットの名前は、アウル・ニードと言うそうだ。今は眠っているが、最初の頃より消耗してる感じがする。

「そう……。なんとかなるのね？」

「ええ。本国から、アーモリーワンで捕まったエクステンデットの治療研究の資料が届きましたので」

「だいぶ消耗しているようだけど？」

「さすがに艦内ですから、フェブラリウス市と同じレベルの治療は施せません。が、これなら本国まで十分持つ物と思われれます」

「そう」

「後、艦長の存在がありがたいですな。エクステンデットは投薬より精神操作等を中心として強化された者らしいので。このようにちよくちよく顔を出していただけると、精神的、容体的にかなりの落ち着きを見せます」

「はあ……。じゃ、措置は今まで通り続けてちょうだい」

「分かりました」

そっか、エクステンデットの少年、助かるんだ。ザフトの人を何人も殺した相手なのに、素直によかったと思える。だって、ロドニアのラボの話、そして今のこの精神操作された証のような状態の少年を見ると、そう思ってしまう。この少年だって被害者だ。

艦長が立ち去り際、つぶやくのが聞こえた。

「情が移っちゃったかな。はあ……。まだ若いつもりだったのになあ。あんな大きな子供なんている年じゃないわよ」

修理も終わり、ミネルバもジブラルタルへ出航しようとしていたある日、とんでもない知らせが入った。

ユーラシアへの反乱が頻発していたユーラシアに、ユーラシア中央

より地球軍が侵攻。既に3都市が壊滅したと言っ

ミネルバは艦隊司令部の命を受け、次の攻撃目標と目されるベルリンに向かった

急ぎティレニア海を抜けリヨン湾から上陸、北東に進路を取る。

「あーあ、ジブラルタルまであと少しなのに、反対方向に行かなきゃならないとは、付いてないねえ」

「そうですね、ハイネさん」

「だが、誰かが止めねば奴等はますます頭に乗って都市を焼き続けるだろう！ そんなことは決して許されることではない！」

「そりゃそうだ。しかし、今からしゃかりきになってもしょうがないじゃないか。力を抜けよ、アスラン」

「……そうですね、すみません」

「謝る事はないさ。でもよかったよ。君とシン、一時は引きこもりになるんじゃないかと心配したからねえ」

「引きこもり、ですか」

「はは、冗談さ。きつとすぐに立ち直るだろうと信じていたよ。シンは？」

「シンなら、都市を壊滅させたのが巨大なモビルアーマーらしいと言うので、入ってきた情報と今までに出遭った敵モビルアーマーから作り上げた仮想のモビルアーマー相手にシミュレーションやります。朝から晩まで。体壊さないか心配なぐらい」

「そう言う立ち直りの方法もあるさ。じゃあ、俺も付き合ってくるか。連携が重用だったようだからな。敵モビルアーマーを倒すのに、だろ？」

「ええ、そうでした。私も行きます！」

「俺も行きます」

ベルリンまでの間、あたしたちはこうして対敵巨大モビルアーマー対策に明け暮れた。

『コンディションレッド発令、コンディションレッド発令。パイロットは搭乗機にて待機してください』

いよいよ、ベルリンが目視できる地点にまで来たのだ。ベルリンはすでに攻撃を受けているらしい。

『みんな！』

「何でしょうか？ 艦長」

『情勢は思ったより混乱してるわ。既に前線の友軍とは連絡が取れなくなっています』

「「ええ？」」

『戦力が苦しいのは承知しているけど、本艦は何としてもあれを止めなければなりません。司令部は貴方達に期待しているわ。お願いね』

「……………」

「さあ、訓練の成果を見せてやろうぜ！ パーツと行って、さっさと倒そうぜ」

「「はい！」」

「ルナマリア・ホーク、グフ、出るわよ！」

……………

「何なんだよこの化け物は！」

「いったい何門のビーム砲積んでんのよ！」

敵巨大モビルアーマーの円盤ユニットの外周から無数のビームが放

たれ街を破壊していく！

インパルスとセイバーがビームライフルを撃つ！

あれは！ やはり持っていたか！ 陽電子リフレクター！
でもこんなにくつつも広い範囲で！

「死角は下よ！」

「やらせるかー！」

「何？」

今まで巻き添えに会つのを避けていたらしい敵の護衛らしきモバイル
スーツ隊がこちらに向かつてくる！

「アスラン、シン。相手頼む！ 俺とルナマリアでモバイルアーマー
は潰す！」

「了解！」

「はあああッ！！」

あたしは一気にモバイルアーマーの円盤の下に潜り込み、コクピット
付近にドラウプニルを叩き込む！

効かない？ まさか、ラミネート装甲？ なら！スレイヤーウィツ
プ！ 高周波パルスでコクピットの装甲が裂ける！

「危ない！ ルナマリア！」

何？ とっさに避ける！

何あれ！ こいつモビルスーツでもあるの？ 巨大な手が飛んでビームを放ってくる！

ハイネさんがその巨大な手にドラウプニルを叩き込む！

「まじかよー！」

その巨大な手は、陽電子リフレクターを張った！ こんな物まで！

「ルナマリア！ こいつらは俺が引き受ける！ 早く本体を潰せ！」

「はい！」

あたしはテンペストを抜く！

「うああああー！！！」

降下しながら巨大な脚を切り裂く！ 支持部を失ったモビルアーマーは重い響きを立てて倒れる！

「これでとどめよー！」

一気に装甲の裂け目からコクピットを串刺しにする！

敵巨大モビルアーマーは、ようやく動きを止めた……

敵を倒しただけで事が終わるわけではなかった。

あたしたちが敵を倒してから、再建されたザフトの現地司令部。そ

れは今被害の救助にてんてこ舞いだ。

彼らにちよつと悪いと思いなから、あたしは戦の疲れを癒していた。

『議長からの緊急メッセージです。各員可能な限り聞くように』

いきなり艦内放送が流れ、デュランダル議長の声が流れ始める。

何だろうか？

休憩室の大型スクリーンの前に走る！ そこにはどんどん人が集まってきた。

『……こうして未だ戦火の収まらぬわけ。そもそも、またもこのような戦争状態に陥ってしまった本当のわけを。

各国の政策に基づく情報の有無により、未だご存知ない方も多くいらつしやるでしょう。』

これは過日、ユーラシア中央から西側地域の都市へ向け、連合の新型巨大兵器が侵攻したときの様子です』

画面に、あの巨大モビルアーマーの姿が映し出される。

『この巨大破壊兵器は何の勧告もなしに突如攻撃を始め、逃げる間もない住民ごと3都市を焼き払い尚も侵攻しました。我々はすぐさまこれの阻止と防衛戦を行いました。残念ながら多くの犠牲を出す結果となりました。侵攻したのは地球軍、されたのは地球の都市です。何故こんなことになったのか。連合側の目的はザフトの支配からの地域の解放ということですが、これが解放なのでしょうか？
こうして住民を都市ごと焼き払うことが！

確かに我々の軍は連合のやり方に異を唱え、その同盟国であるユーラシアからの分離、独立を果たそうとする人々を人道的な立場からも支援してきました。こんな得るものないただ戦うばかりの日々に終わりを告げ自分たちの平和な暮らしを取り戻したいと。戦場に

など行かず、ただ愛する者達とありたいと。そう願う人々を我々は支援しました』

『あの連合の化け物が何もかも焼き払っていったのよ！』

『敵は連合だ！ザフトは助けてくれた！嘘だと思っただけなら見に来てくれ！』

被災者の方々が声を上げている。

そつだ。あのモビルアーマーのやった事はひどすぎる！ 改めて怒りがこみ上げる。

『なのに和平を望む我々の手をはねのけ、我々と手を取り合い、憎しみで討ち合う世界よりも対話による平和への道を選ぼうとしたユーストラス西側の人々を連合は裏切りとして有無を言わず焼き払ったのです！ 子供まで！

何故ですか？ 何故こんなことをするのです！ 平和など許さぬと！ 戦わねばならないと！ 誰が！ 何故言うのです！ 何故我々は手を取り合ってはいけないのですか！？』

あ、ラクス・クラインの替え玉が現れ、議長を静めるように議長の肩に手を置く。

アスラン……複雑そうな顔をしてる。

『このたびの戦争は確かにわたくしどもコーディネイターの一部の者達が起こした、大きな惨劇から始まりました。それを止め得なかったこと、それによって生まれてしまった数多の悲劇を、わたくしどもも忘れはしません。被災された方々の悲しみ、苦しみは今も尚、深く果てないことでしょう。それもまた新たな戦いへの引き金を引いてしまったのも、仕方のないことだったのかもしれない。』

ですが！ このままではいけません！ こんな討ち合うばかりの世

界に、安らぎはないのです！ 果てしなく続く憎しみの連鎖も苦しさを、わたくし達はもう十分に知ったはずではありませんか？ どうか目を覆う涙を拭いたら前を見てください！その悲しみを叫んだら今度は相手の言葉を聞いてください！そうしてわたくし達は優しさと光の溢れる世界へ帰ろうではありませんか！
それがわたくし達全ての人の、真の願いでもあるはずです！」

再び議長が立ち上がり話し始める。

『なのにごうあつてもそれを邪魔しようとする者がいるのです。自分たちの利益のために戦えと、戦えと！ 戦わない者は臆病だ、従わない者は裏切りだ、そう叫んで常に我等に武器を持たせ敵を創り上げて、討てと指し示してきた者達。平和な世界にだけはさせまいとする者達。このユーラシア西側の惨劇も彼等の仕業であることは明らかです！

間違った危険な存在とコーディネイター忌み嫌うあのブルークコスモスも、彼等の創り上げたものに過ぎないことを皆さんは御存じでしょうか？

その背後にいる彼等、そうして常に敵を創り上げ、常に世界に戦争をもたらそうとする軍需産業複合体、死の商人、ロゴス！ 彼等こそが平和を望む私達全ての、真の敵です！

そうか！ デイオキアでの議長の話思い出す。

そうか……プラントを地球の一員だと認めてもらう、プラントのためになる事、とうとう始めたんだ！

まさか敵モビルアーマーまで議長の仕業なんて……はは、それはありえないか。

『私が心から願うのはもう二度と戦争など起きない平和な世界です。よってそれを阻害せんとする者、世界の真の敵、ロゴスこそを滅ぼ

さんと戦うことを私はここに宣言します！

私だって名を挙げた方々に軍を送るような馬鹿な真似をするつもりはありません。ロゴスを討つというのはそういうことではない。ただ、彼等の創るこの歪んだ戦争のシステムは、今度こそもう本当に終わりにしたい。

コーデイネイターは間違った危険な存在と、解り合えぬ化け物と、何故あなた方は思うのです？　そもそもいつ？　誰がそう言い出したのです？　私から見ればこんなことを平然と出来るロゴスの方がよほど化け物だ。それもこれもただ我々と戦い続けるためだけにやっている』

画面には、ロドニアのラボで得られたらしい資料が流れている。

『己の身に危険が迫れば人は皆戦います。それは本能です。だから彼等は討つ。そして討ち返させる。私達の歴史はそんな悲しい繰り返しだ。戦争が終われば兵器は要らない。今あるものを壊さなければ新しいビルは造れない。畑を吹き飛ばさなければ飢えて苦しむ人々に食料を買わせることが出来ない。平和な世界では儲からないから、牛耳れないからと、彼等は常に我々を戦わせようとするのです。こんなことは本当にもう終わりにしましょう。我々は殺し合いたいわけではない！　こんな大量の兵器など持たずとも人は生きていきます。戦い続けなくとも生きていけるはず！　歩み寄り話し合い、今度こそ彼等の創った戦う世界から共に抜け出そうではありませんか！』

議長演説は終わった。

シンは明るい顔でレイと話してる。みんなも。

うまくやったじゃない！　議長！　みんなの意気が上がってる！

あたしも会話の輪に加わった。

二日後、オーブに政変があり、久々にアークエンジェルとともに姿を現したカガリ・ユラ・アスハの手によって、ウナト・エマ・セイランが宰相の座から追放され、連合との条約の破棄を宣言した事がニュースに流れた。

新しい力

ベルリンでの支援に一区切り付いたところで、ミネルバは再び来た道を戻り、リヨン湾から地中海へ出てジブラルタルへ向かった。

『これより本艦はジブラルタルへの入港シークエンスを開始します。各艦員は所定の部署に就いてください。繰り返します……』

「ジブラルタル入って次はどうすんのかな？俺達」

「さあな。だが先日の議長の言葉に沿った形での作戦が展開されることは確かだ」

「んー」

「ロゴスを討つなんて。議長御自身だって難しいって仰ってたのにね。とうとうやるのね！」

「ああ、どうしてもやらねばと思われたのだろう。あの悲惨な状況を見られて」

「うん」

「シンは気が乗らないの？ 対ロゴスは」

「いや、そんなこと……議長の言葉聞いて俺凄く感動したよ。難しいって言ったのに、議長やるんだ。諦めないんだって。それが本当に戦争を終わらせる唯一の方法だから」

「そう、よかった！」

「だったら俺だってどんな敵とでも戦ってやるさ！」

「その意気よ！」

「でも、少し力を抜いた方がいいぞ」

あたしとレイはシンの肩をぽんと叩いた。

「あ、ほら、エスコート艦よ！ ジブラルタルにこんなに戦力が集

まってる。頼もしいね」

「ああ、そうだな」

『入港完了。保安要員及び整備班、船務A班は直ちに所定の作業を開始せよ』

入港してすぐに、ミネルバからアスランとあたしに基地指令から出頭命令が出た。
なんだろう？

……

「失礼します！ ルナマリア・ホーク、アスラン・ザラを連れて参りました」

「うん」

「お久しぶりです議長」

「先日のメッセージ、感動しました！ デイオキアを思い出しました」

「いやありがとう。私も君達の活躍を聞いているよ。いろいろあったが、よく頑張ってくれた」

「ありがとうございます」

「アスラン！」

「あ……」

あ、ラクス・クラインの替え玉がアスランに抱きつく！ こんな時にまで！ 空気読め！

「お元気でした？」

「ああ……」

「会いたかったですわ」

「うう…お久しぶりですラクス」

「さて、もう知っていることと思うが、事態を見かねて遂に私はとんでもないことを始めてしまったね」

「いえ！とんでもないなんてそんな……」

「また話したいこともいろいろあるが、まずは見てくれたまえ。もう先ほどから目もそちらにはかり行ってしまっているだろう？」

「あー！」

格納庫に光が灯される！ これは、モビルスーツ！

「ああ……」

「ZGMF-X42S、デスティニー。ZGMF-X666S、レジェンド。どちらも従来のを遙かに上回る性能を持った最新鋭の機体だ。詳細は後ほど見てもらうが、おそらくこれがこれからの戦いの主役になるだろう」

「ああ……」

「君達の新しい機体だよ」

「ええ！？ 私達の新しい！？」

「うん」

「ああ……」

「デスティニーは火力、防御力、機動力、信頼性、その全ての点においてグフを凌ぐ最強の接近戦用のモビルスーツだ」

「ああ……」

「レジェンドは量子インターフェイスの改良により、誰でも操作出来るようになった新世代のドラグーンシステムを搭載する実に野心的な機体だね。どちらも工場が不休で作り上げた自信作だよ。どうかな？ 気に入ったかね？」

「はい！ 凄いです！」

「早く詳細が知りたいものですね」

「デステイニーには特にルナマリア君を想定した調整を加えてある」

「え？私をですか？」

「最新のグフの戦闘データを参考にしてね」

「はあ」

「君の操作の癖、特にスピードはどうやら通常を遙かに越えて来始めているようだね」

「ええ……」

「いや凄いものだな君の力は。このところますます」

「いえ、そんな」

「グフでは機体の限界にイラつくことも多かったと思うが、これならそんなことはない。私が保証するよ」

「はい！ありがとうございます！」

「君の機体はこのレジェンドということになるが、どうかなアスラ。ドラグーンシステムは」

「え……」

「私は君なら十分に使いこなせると思うな」

「ジャステイスのファトウムのような物でしょうか。面白そうですね」

あたしたちは新しい機体を与えられて勇躍した。早く試してみたい！

デステイニーの武装は

両腕にスレイヤーウィップ

掌にパルマファイオキーナ掌部ビーム砲

肩部にビームサーベルを兼ねたフラッシュエッジ2ビームブーメラン

側頭部に近接戦闘用の機関砲

威力と速射性を高めた高エネルギービームライフル

背中の右ウエポンラックにレアメタルを使って作られた、ビームコ

ーティングされ巨大な実体刀剣を兼ねたビームソード「アロンダイ

ト

左のウイポンラックには高エネルギービーム速射砲
と言った所だ。

防御の方も

両手の甲にソリドウス・フルゴール ビームシールド発生装置
ベルリンで遭遇した巨大モビルアーマーのビーム砲も防ぐらしい！
左腕に対ビームシールド
全身がVPS装甲で、あたしのカラーに赤く発色！

そして背部の翼型スラストユニットはなんと惑星間推進システム
であるヴォワチュール・リュミエールの近縁種であり、在来機を遥
かに凌駕する大推力を効率的にもたらすと言う！ 空中戦でカオス
の加速についていけなかったあたしにとってはなによりありがたい！

慣熟訓練は良好だった。この天使から後押しされてるような加速性
能！ これなら、カオスにもセイバーにもインパルスにも負けない！

他にもミネルバにはガイア、アビスが降ろされてカオスが搬入され
た。こちらはレイにとのご指名だ。

モビルスーツをやりくりして、搭乗割りはとりあえず次のようにな
った。

DESTINY……ルナマリア

REGEN……アスラン

IMPULSE……シン

SEYBAAAA……ハイネ

CHAOS……レイ

GF……ゲイル

グフ……………シヨーン

色は、レジェンドは赤紫、セイバーはオレンジ、カオスは白基調に調整され、グフは一般的な青に塗りなおされた。

ジブラルタルには、なんと議長の宣言に賛同した東アジア共和国など、連合からの軍も集結してきた。

今までだったら信じられない光景！

そしてミネルバが出航の時が来た。目指すはブルーコスモス盟主ロード・ジブリール以下ロゴスの幹部と地球連合軍のロゴス派の部隊が集結し籠城している、アイスランド島にある地球連合軍の最高司令部　へブンスベース！

へブンスベースには以下のような通告がなされた。

『我等ザフト及び地球連合軍はへブンスベースに対し以下を要求する。一、先に公表したロゴス構成メンバーの即時引き渡し。二、全軍の武装解除、基地施設の放棄』

これをどうか飲んでほしい。話し合えば、それに越したことはないのだから。

！　敵基地からミサイルが！　射撃が開始された。そしてあれは！

ベルリンに出現した巨大モビルアーマー　デストロイが5機も！
巨大モビルアーマーのビーム砲でこちらの艦艇が次々にやれられていく！

『コンディションレッド発令！ 総対戦用意！』

あたしたちはモビルスーツに乗り込む！

「いよいよね」

「ああ、終わらせよう、」

ヘブンスベース攻略戦

ザフト軍の降下ポッドが展開する。あたしたちの出番はまだかな。

！ ヘブンスベースに火柱が立った！

「くっ！」

「なんなの！？ あの火柱！？」

「味方が……やられてる……みんな……」

「何なんだよ！ これは！」

入ってきた情報は……降下部隊消滅

「艦長！ 行きます！ 早く発進を！ こんなこともう許しておけません！」

「でもルナマリア……」

「頼む」

議長の声だ！

「はい！」

「……モビルスーツ隊全機発進！」

『ルナマリア・ホーク、デステイニー発進スタンバイ。全システムの起動を確認しました。発進シークエンスを開始します。ハッチ開放。射出システムのエンゲージを確認しました。カタパルトオンライン。射出推力正常。針路クリアー。デステイニー、発進どうぞ』

「ルナマリア・ホーク、デステイニー、行くわよ！」

『レジェンド、発進どうぞ』

「アスラン・ザラ、レジェンド、出る！」

『インパルス、発進どうぞ』

「シン・アスカ、インパルス、行きます！」

『セイバー、発進どうぞ』

「ハイネ・ヴェステンフルス、セイバー、行くぜ！」

『カオス、発進どうぞ』

レイ・ザ・バレル、カオス、発進する！」

『ゲイル機、発進どうぞ』

「ゲイル・リバーズ、グフ、行くわよ！」

『シヨーン機、発進どうぞ』

「シヨーン・コネリー、グフ、出る！」

あたしたちは次々に飛び立った！

「行くわよ！」

「ああ！ まずDESTROIを潰すぞ！ シン、レイ、ゲイル付いて来い！ 残りはハイネに従え！」

「OK！じゃ、ルナ、シヨーン、端から潰していくぞ！」

「はい！」

「ビームシールドありますから！ 私が先陣切ります！」

「わかった、まわりの雑魚はまかしときな！」

そう言うとハイネさんとシヨーンはウィンダムを駆逐していく！

あたしも！

「はああああー！」

ビームシールドを構えて突っ込む！ あは、ほんとにデストロイのビーム砲に耐えてる！

？ なんだか知らないけど、デストロイ、MS形態になった！
ビーム避けやすくしてくれてありがとう！

胸から撃たれるビームを避けながら、コクピットにスレイヤーウィップを放ち、開いた穴からビーム速射砲を叩き込む！ まず一機！

「モビルスーツ隊！ 開いた穴から突っ込め！ ルナはデストロイを倒せ！」

「はい！」

上空から次のデストロイを探す！ いた！

こいつもMS形態に？ 威嚇してるつもり？

一気に急降下して頭からアロナイトでぶった切る！ これで2機！

遠くに見えるのは……シン！ ちょっと苦戦してる！

「シン！ ソードに換装するのよ！」

「わ、わかった！」

「エクスカリバーをアスランにも！」

「了解！」

デストロイが手を飛ばしてきた！

「ルナ、手にかまうな！ 俺達が相手する！」

「了解！」

あたしは地上低く駆ける！

敵大型モビルアーマー ユークリッドと言つらしい が往く手

を阻み陽電子リフレクターを張る！ 無駄よ！

スレイヤーウィップで発生装置を叩き切る！ 二撃目でコクピット
を破壊する！

さあ、着いたわよ！

フラッシュエッジ2ビームブーメランをデストロイの脚に放つ！

脚部を失い倒れたところをコクピットを切り払う！ 3機目！

……残りの2機は、シンとアスランが倒していた。

程なくして、敵本部に白旗が揚がった……

これで終わりだと思つただけど……

「ええっ！？ ジブリールがない！？」

「いないって…そんな！」

「基地が降伏する前に一人だけこっそりと逃げたらしい」

「ええ？」

「他のロゴスのメンバーは全て見捨てて」

「やつかいな事になったわね」

「やはりそう簡単には終わらないな」

「そんなことないさ！今度見つけたら絶対俺が踏み潰してやる！」

「ああ、それにしてもどこに逃げ込んだんだか」

「どっちにしても、最終的には月、かな」

「月、か……」

へブンズベースの処理が落ち着いた頃、あたしたちに勲章の授与式があった。

シンやレイ達が叙勲され、最後はあたし。

「へブンズベース戦での功績を称え、ルナマリア・ホークにネビュラ勲章を授与するものとする。おめでとう。二つめだな。いや全く素晴らしい」

「ありがとうございます！」

「それからこれを、ルナマリア・ホークに」

「議長……」

それは、フェイスの証だった。

「不服かね？」

「いえそんな！そんなことはありません！けれど、本当にもらってしまっただけのものか……」

「これは我々が君の力を頼みとしている、ということの証だ。どうかそれを誇りとし、今この瞬間を裏切ることなく今後もその力を尽くして欲しいと思ってね」

「光荣です。ベストを尽くします！」

あたしはフェイスになった。

「では」

「お先に失礼します」

「ええ、ご苦労様。おめでとうルナマリア」

「ありがとうございます！」

「ほんとすごいヤルナ、二つめなんて」

「えへへ」

議長達も部屋から出てきた。そこに、ザフトの兵士がやってきた。

「議長」

「何だ？」

「ロード・ジブリールの所在が分かりました」

「え？」

あたしたちは聞き耳を立てた。

「カーペンタリア情報部からの報告です」

「カーペンタリアから？で、彼はどこに？」

「パナマから、月に上がりました。ダイダロス基地です」

やっぱり月！

糾弾

オーブのカガリ代表の声明が出されると言う。のんびりしていたあたしたちは自然に休憩室の大画面テレビの前に集まった。

『オーブ連合首長国代表首長、カガリ・ユラ・アス八です。今日私は全世界のメディアを通じ、プラント最高評議会議長、ギルバート・デュランダル氏にメッセージを送りたいと思います』

「あ！ オーブの馬鹿姫！」

『過日、様々な情報と共に我々に送られたロゴスに関するデュランダル議長のメッセージは確かに衝撃的なものでした。ロゴスを討つ。そして戦争のない世界にという議長の言葉は、今のこの混迷の世界で政治に携わる者としても、また生きる一個人としても確かに魅力を感じざるを得ません。ですが、議長は、ロゴスが意図的に『世界』とやらを操作し、戦争を起こしてきたという。これはつまり、ロゴスという、民間の一組織が、世界各国の世論を誘導し国家間紛争を誘導してきたという意味であると解釈している。個人的にはこれだけで既に大いに疑問があるが、仮にそうだとして、これを裏付ける証拠はどこにあるのか？ 議長はまず、これを立証するべき…』

まともな事言うようになったじゃん。でも、それはプラント、議長にとっては突っ込まれたくない事なのよね。せっかくロゴスを共通の敵にして、まとまって、勝ち組になつて……

「ん？」

画面が乱れ、ラクス・クラインの替え玉が現れる。

『わたくしはラクス・クラインです。過日行われたヘブンズベースでの戦闘はもう皆さんも御存じのことでしょう。プラントとも親しい関係にあったオーブが、何故ジブリール氏を庇うような発言をするのか理解することは出来ません。ブルーコスモスの盟主、プラントに核を放つことも巨大破壊兵器で街を焼くことも、子供達をただ戦いの道具とすることも厭わぬ人間を、何故オーブはそうまでして庇うのでしょうか。わたくし達の世界に、誘惑は数多くあります。より良きもの、多くのものをと。望むことは無論悪いことではありません。ですがロゴスは別です。あれはあつてはならないもの。この人の世に不要で邪悪なものです。わたくし達はそれを……』

『その方の姿に惑わされないください』

「あー！」

また画面が乱れ、再びオーブのカガリ・ユラ・アスハが映る。そしてその横には……

『わたくしはラクス・クラインです』

まさか、今度は本物のラクス・クライン！？

『わたくしと同じ顔、同じ声、同じなの方がデュランダル議長と共にいらっしやることは知っています。ですが、わたくし、シーゲル・クラインの娘であり、先の大戦ではアークエンジェルと共に戦いましたわたくしは、今もあの時と同じ彼の艦とオーブのアス八代表の下にあります。彼女とわたくしは違うものであり、その想いも違うということalmazは申し上げたいと思います。わたくしはデュラン

ダル議長の言葉と行動を支持しておりません』

これは……一体どうなるんだろう!? 皆息を呑んでいる。画面はテレビ局のものが気を利かしたのだろう。左右に分割され、ラクス・クラインと、その替え玉が同時に映っている。

『戦う者は悪くない、戦わない者も悪くない、悪いのは全て戦わせようとする者。死の商人ロゴス。議長のおっしゃるそれは本当でしょうか? それが真実なのでしょうか? ナチュラルでもない、コーディネーターでもない、悪いのは彼等、世界、貴方ではないのだと語られる言葉の罠にどうか陥らないでください。無論わたくしはジブリール氏を庇う者ではありません。ですがデュランダル議長を信じる者でもありません。我々はもっとよく知らねばなりません。デュランダル議長の真の目的を』

……その時、一人の夫人が現れると、ラクス・クラインの替え玉の横に立ち、彼女を安心させるように、にこりと微笑んだ。

『ラクスさん、とりあえずラクスさんと呼ばせていただきます。わたしはロミナ・アマルフィと申します。前大戦時、あなたと共に戦ったというキラ・ヤマトに殺されたニコル・アマルフィの母です。いいえ、母でした』

『それは……それはお気の毒でした、おばさま、しかし……』

『いたわっていただく必要はありません。ラクスさん、わたしの息子はザフトの信頼を守って、戦友をかばうために崇高な戦死を遂げたのですから』

『そうですか、いえ、おばさまはまさにザフト軍人の母の鑑ともいふべき人です。おばさまの賞賛すべき精神は必ず厚く報われるでしょう』

『ありがとうございます。わたしはただ、ラクスさんにひとつ質問』

を聞いていただきたくて参ったのです』

『それはどんな質問でしょう、私が答えられるような質問だといいいのですが……』

『あなたは今まで、どこにいました？』

『は、なんですって？』

『わたしの夫は息子を失った悲しみに耐え、プラントのために働きました。今も働いています。ラクスさん、あなたはどこにいました？夫が戦争の早期終結の祈りを託したフリーダムを強奪してまで、ご自分の理想を実現しようとなさったあなたはどこにいました？』

『おばさま……』

『あなたはどこにいました？ プラント市民の多くは肉親、知り合いを失くしながらもプラント再建のために働いてきました。今、デュランダル議長の言葉に疑問を投げかけるあなたはどこにいました？ あなたは、もしかしたら本当にラクス・クラインなのかもしれません。ですがご自分が犯罪を犯してまでなそうとした事の責任はどうなさったの？ 人がしている事を横から批判するのはたやすい事です。あなたは、ご自分が主張したことの実現のために、戦後、何か実行なさったの？』

たぶん本物のラクス・クラインは絶句している。

唐突に、オーブ行政府からの放送は中断された。

『……あ、あたしは、ラクス・クラインじゃあ、ありません！』

え？いきなりラクス・クラインの替え玉が正体ばらしちゃった？

どうすんの？ どうすんのよ！

『あたしは、プラントが混乱していた時に、プラントの混乱を静めるためだと言われ、ラクス・クラインの振りをしました。それから、ラクス・クラインの振りをしてきました。プラントのために！』

ラクスさんは、「その方の姿に惑わされないでください」と言いました。じゃあ、あたしも言います。みなさん！ 姿や名前ではなく、実際にしてきた行動で判断してください！ あたしは知っています。先の大戦から、議長がどれだけ平和のために苦勞してきたのか、プラントのために苦勞しているのか！ みなさんも知っているはずです！ 今一度お願いします。あたしが言えた義理じゃないですが、姿や名前に惑わされず、行動で判断してください。今まで騙してごめんなさい。ありがとうございました」

彼女は深々と頭を下げると、画面から去ってゆき……放送は終わった。

「レイ！ ルナ、待てよ！」

「なんだ？」

「え……あいや……あの、あのオーブのラクス・クラインのこと、レイとルナはどう思う？」

「どう？とは？」

「いやだから……どっちが本物って話」

「なんだ。馬鹿馬鹿しい」

「え……」

「まあ、本人が、ラクス・クラインじゃないって言うてんだから、こちらのラクス・クラインは本人じゃなかったって事でしょう？」

「あ……」

「だが何故かな。何故人はそれを気にする。本物なら全て正しくて、偽者は悪だと思っからか」

「？」

「俺はそれはどうでもいい」

「レイ……」

「議長は正しい。俺はそれでいい」

「シン」

「ん？ なに？ ルナ？」

「大事なのはどちらが本物のラクスカ、じゃ無くてどちらが私たちのためになる人物か、でしょ？ 今のところオーブのラクスは私たちプラントにとって害でしかないわ。せつかく議長がプラントのためについて動いているのにそれに水を差すようなこととして……綺麗事だけじゃ物事は動かないっての！ 自分達の都合の悪い所は綺麗事で糊塗するくせにね！」

「う、うん」

「そんなことより俺達には考えておかねばならないことが他にあるだろう」

「え？」

「フリーダムよ」

「ああ」

「シン、いいか？」

「ん？」

「何をやってるんだ？ 3人そろって」

「シン、アスランだ」

「え？ああ……」

「シン！ アスランだってば！ いったん止めなさい、それ」

「ん？ フリーダム？」

「カメラが向いてからの反応が恐ろしく早いな。スラスターの操作も見事だ。思い通りに機体を振り回している」

「フリーダムのパワーはインパルスより上なんだ。それをここまで操るなんて……」

「シン！ レイも何をやってるんだ？」

「シン、いいかげんにしなさい！」

ぽか！

「何をって、ご覧の通りフリーダムとの戦闘シミュレーションですよ。一体なんですか？」

「何故そんなことをしているんだ？」

「強いからです」

「ふむ？」

「俺の知る限り、デステイニーとレジェンドを除けば、今モビルスーツで一番強いのはこいつです。なら、それを相手に訓練するのはいいことだと思いますが」

「ふんふん、それで？」

「何かあった時、あれを討てる奴がザフトにいなきゃ困るでしょ？まるつきりわけの分かんない奴なんだから」

「アスラン、シンの言っていることは間違っていないと思います」

「まあね」

「フリーダムは強い。そしてどんな思惑があるかは知りませんが、我が軍ではないのです。シンの言うような事は想定されません」

「だろうな」

「いくら貴方がかつて共に戦った者だとしても……」

「いや、俺も混ぜろ」

「ええ！？」

「いいんですか！？ アスラン」

「いいさ、確かにシンの言う通りだろう、ルナ。俺もいい加減あいつらに話しても話を通じないのに疲れた……シン、何をいつまでも鳩が豆鉄砲食らったような顔している？ ふ……」

「では、よろしければアスランにもそのご経験からアドバイスをいただければと思いますが」

「ああ、前にも言ったが、フリーダムはとりあえず最初はコクピットを狙ってこない。追い込まれれば知らんがな。それから基本的にフリーダムは遠距離砲戦用の機体だ。接近戦用の武装は連結する事もできる二本のビームサーベルだけだ。その意味ではデステイニーかインパルスが相手をし、他は牽制その他で援護するのがいいだ

るう」

「なるほど。参考にあります」

「ただ……前大戦時は俺の近接戦闘重視のジャスティスと組んでたが……ユニウスセブン条約違反の機体を隠し持っていた奴等だ。新しい機体を開発してもおかしくない。ジャスティスとのシミュレーションもやっておいたほうがいいだろうな」

「ええ！？」

「そんなに驚く事でもないだろう、シン。いつの間にか大破してたフリーダムを修理してたんだ。ありえない話じゃない」

「そうだな、シン。アスランの言う通りだ」

「じゃあ、強化した機体を想定してシミュレーションした方がいいでしょうか？」

「そうだな、ルナ。よし、俺から戦闘シミュレーターを担当者に言つてとりあえず仮想のデータを追加させておこう」

「ありがとうございます！」

こうしてあたしたちは、力強い助けを得て対フリーダムのシミュレーションに専念することになったのだ。

天空の鎮魂歌

「ふー、疲れた！ でもいい汗かいたわ」

「ルナ、この数日ですごい上達じゃないか！ もう完璧にフリーダムに勝てるな！」

「ふふん、くつつく事が出来れば、ジ・エンドよ。シンもすごいじゃない。最初からコクピットを狙う設定のフリーダムに、ほとんど勝てる」

「なんか、妙に頭が冷静になってクリアーになる時があるんだよね。ゾーンに入る”って言うのかな、相手の動きが読めるんだ。でも、まだまだ自分の力を100%出した気がしない！ 俺はまだまだ強くなれる！」

「私も負けないわよ！ アスランに強化ジャステイスで相手してもらったけど、まだまだだなあ。アスランって、駆け引きの引き出しが多いって言うの？ ためになっただわ」

「大変だ！」

「え？ 何？」

ショーンが血相を変えて駆けて来た。

「どうしたって言うんだ？」

「プラントが、プラントが攻撃された！」

「な、なんだってー！？」

あたし達は食堂のテレビの前に急いだ！

ヤヌアリウスが……そしてディセンベルが、被害を受けた状況が映っていた。

「何で……何でこんな……」

「ジブリールだな」

レイが情報端末で調べながら言う。

「月の裏側、ダイダロス基地から撃たれた。こっちがいつも通り表のアルザツヘルを警戒している隙に。ダイダロスにこんなものがあったとは……」

「何で！裏側からってそんなの無理じゃない！どうやって？」

「奴等は廃棄コロニーに超大型のゲシュマイディヒパンツァーを搭載してビームを数回に屈曲させたんだ」

「そんな……」

「このシステムならどこに砲があろうと屈曲点の数と位置次第でどこでも自在に狙える。悪魔の技だな」

「くっ！そんな、そんなことを……」

……

『みんな連戦で疲れてると思うけど、正念場よ。ここで頑張らなければ帰る家がなくなるわ。いいわね』

ミネルバはカーペンタリアから月艦隊と合流すべく発進した。

司令部との連絡がついたあたしたちを待っていたのはとんでもない命令だった。

「砲の本体を私達だけでですか？」

「だけかどうかは分からないけど。ともかくそれが本艦への命令よ」「確かに、ここからではダイダロス基地の方が近い。そういう判断でしょう」

「ええ。あれのパワーチャージサイクルが分からない以上、問題は

時間ということになるわ。駆け付けたところで間に合わなければ何の意味もないものね」

「敵が月艦隊に意識を向けているのならうまくいけば陽動と奇襲になるということですね」

「そういうことよ」

「奇襲……」

「厳しい作戦になることは確かよ。でもやらなければならぬわ。いい？」

「はい。分かりました」

「了解しました！ またあれを撃たれるなどもう絶対あつてはならないことですから」

「頼むわね」

「は！」「は！」

……

「ブリーフィングを始める。第二射までに月艦隊が第一中継点を落とせば辛うじてプラントは撃たれない。だが奴等のチャージの方が早ければ艦隊諸共薙ぎ払われるぞ。トリガーを握っているのがそういう奴だということは知っているだろう」

「はい、アスラン」

「そこで直接砲を狙う！ もちろん相手の防御も厚いだろう。今までに出てきた陽電子リフレクターを備えたモビルアーマー、巨大モビルアーマーと言った物が出てくる事も考えられる。では作戦を話そう……」

それは、レジエンド、カオス、グフ、そしてミネルバのタンホイザーまで囷に使った陽動に、更に時間差をつけてインパルス、セイバーが攻撃に加わり、あたしがその混乱した隙に砲のコントローラームを落とすという物だった。

『ブリッジ遮蔽。コンディションレッド発令。パイロットは搭乗機にて待機してください』

「ではいいルナ。タイミングを誤るなよ」
「ええ」

「俺達も可能な限り援護をする。だが基本的にはあてにするな。すれば余計な隙が出来る」

「分かってるわ。ご心配なく」

「では行こう！」

「はい」

「ルナ」

「急げよ」

「気を付けて、ルナ」

「シンこそ」

「でもやっぱり駄目だよ」

「ルナが一人で砲のコントロールを落とすなんて！危険すぎる！」

「シン……」

「やっぱりそれはアスランや俺かレイが……」

「シン！ 同じ事よ！ 陽動で基地を討つのだって同じくらい危険だわ！ みんな一緒よ！ 大丈夫よ私は。近接戦闘に優れたデステイニーが今回の任務には向いてるの。信じなさいよ。私はフェイスよ？」

「ルナ……」

「シン達こそ、気をつけて」

「大丈夫だ」

「え？」

「ルナも艦もプラントもみんな俺が守る！」

「あ……」

「絶対に！」

「うふ」

「じゃあ、お先に！ ルナマリア・ホーク、デステイニー、行くわよ！」

あたしは発進すると、クレーターの影に隠れるように大回りしていく。

レジェンド、カオス、グフも発進したようだ。

注意深く様子を見守る。

やはり、敵はあのデストロイを始めとするモバイルアーマー群を出してきた！ タンホイザーが跳ね返されてる！

インパルスとセイバーが戦闘に入った！ 敵は混乱する！

さあ、いくわよ！

あたしは一気に、しかし慎重に進んでいく。

しかしまだ射出口のそばにモバイルスーツが。！ 敵モバイルスーツがやられた！ これは！ レジェンドのドラグーン！

「行け！ ルナ！ 射出口はもうすぐそこだ！ 背後は任せろ！」

「ありがとう！」

「あれね！」

モバイルスーツの射出口を見つけた！ そこから中にもぐっていく！

センサーを目いっぱい働かせながら進む……ここか！ 壁をぶち破る！ 当たり！ 広い空間に出た！ 下の方には砲が！ すでにエネルギーのチャージによる発光が始まっている。急がなきゃ

コントロールルーム……あそこか！ スレイヤーウィップをぶち当てる！

「ええい！」

開いた穴にビーム速射砲をぶち込む！

爆発が起こる。やった！

あたしは月面に帰還する。

「やったわ！ アスラン！」

「よくやった！ こちらもロード・ジブリールを今度こそ仕留めたぞ！」

「これで終わるのね！」

「ああ、これでやっと……」

その夜はみんなで祝杯を揚げた！

翌日、議長がまた演説をすると言う。

なにを話すんだろう？

「……今私の中にも皆さんと同様の悲しみ、そして怒りが渦巻いています。何故こんなことになってしまったのか。考えても既に意味のないことと知りながら私の心もまた、それを探して彷徨います。私達はつい先年にも大きな戦争を経験しました。そしてその時にも誓ったはずでした。こんなことはもう二度と繰り返さないと。にも

関わらずユニウスセブンは落ち、努力も虚しくまたも戦端が開かれ、戦火は否応なく拡大して私達はまたも同じ悲しみ、苦しみを得ることとなってしまいました。本当にこれはどうということなのでしょう。愚かとも言えるこの悲劇の繰り返しは。一つには先にも申し上げたとおり、間違いなくロゴスの存在所以です。敵を創り上げ、恐怖を煽り戦わせてそれを食い物としてきた者達。長い歴史の裏側に蔓延る彼等、死の商人達です。だが我々はようやくそれを滅ぼすことが出来ました。だからこそ今敢えて私は申し上げたい。我々は今度こそ、もう一つの最大の敵と戦っていかねばならないと』

「あ？」

なんなの？ ロゴス倒したばかりなのに…… あの議長の事だからプラントの損になるような事だけはいらないと思うけど。

『そして我々はそれにも打ち勝ち、解放されなければならないのです。皆さんにも既にお解りのことでしょう。有史以来、人類の歴史から戦いのなくならぬわけ。常に存在する最大の敵、それはいつになっても克服できない我等自身の無知と欲望だということ』

「え？」

『地を離れて宇宙を駆け、その肉体の能力、様々な秘密までをも手に入れた今でも人は未だに人を解らず、自分を知らず、明日が見えないその不安。同等に、いやより多くより豊にと飽くなき欲望に限りなく伸ばされる手。それが今の私達です。争いの種、問題は全てそこにある！ だがそれももう終わりにする時が来しました。終わりに出来る時が。我々は最早その全てを克服する方法を得たのです。全ての答えは皆が自信の中に既に持っている！ それによって人を知り、自分を知り、明日を知る。これこそが繰り返される悲劇を止

める唯一の方法です。私は人類存亡を賭けた最後の防衛策としてデステイニープランの導入実行を、今ここに宣言いたします!」

……デステイニープランで、何?

「……で、なんでみんな揃って私の所に来るのかしら?」

「えーとお、それは、議長と昔なじみだそうですし、何か聞いてないかと」

「レイと話してても『議長を信じる』だけで話にならないし」

「そう言う訳です。何か情報、お持ちじゃないですか?」

「私も詳しい事は知らないわよ。実は昨日早速連絡取ったんだけどね。大掛かりな遺伝子的『自分探し』システムにハローワークを組み合わせたものらしいわ。コーデイネイターとナチュラルの確執を取り除く物、とも言っていたわ」

「取り除く? どうやって?」

「遺伝子ってね、結局能力値を決めるのにダイスを振るようなものだと思うのよ。能力値に付きダイスを二つ振れるとしたら、あたしたちコーデイネイターは謂わば合計7以上になるまで振り直しをしてるような物ね。でも、ナチュラルにもコーデイネイターに匹敵する能力を見せる者がいるのもまた事実よ。それは、まさに遺伝子のダイスが6ゾロを振ったようなね。そこまではいかなくても、優れた能力が人それぞれ何かどうかあるのよ。デステイニープランは、それを見つけてあげる事。自分の一番得意な分野で勝負すれば、ナチュラルだってコーデイネイターに匹敵するわ。いい事? ファーストコーデイネイターのジョージ・グレンでさえオリンピックで金メダルは取れなかったのよ」

「遺伝子の結果で仕事を強制される、とかは無いですか?」

「無いらしいわよ。あくまで自分の意思でやりたい者はやればいい、と言っていたわ。上から強制するのではなくて、人々が自主的に賛同する形で実施するそうよ。遺伝子的にどうこう言われたって好き

なものは好きだし、嫌いな物は嫌いだものね。だいたい……遺伝子であれこれ強制されるの、あの人嫌いだし。ふう……」

そう言えば、聞いたことがある。議長と艦長は昔付き合っていたけど、子供が出来る確率が低く、子供を欲しがった艦長が議長を振ったのだと……

「そうですよね。やってる事が楽しいからいいんだって人、いっぱいいますし、好きだから、素質はあるけどいい加減にやってる人より上達もする事だつてあるだろうし、ハローワークにない新しい仕事考えつく人もいるだろうし」

「それに、プラントの婚姻統制だつて強制ではないでしょ？ 理屈じゃないのよ、理屈じゃね……」

艦長は、憂いを帯びた女の顔になる。子供を生む確率優先で結婚して、後悔したのだろうか？ 艦長の結婚生活は長い物ではなかったとあたりは聞いていた。

「遺伝子でなんかわからない素質だつてありますよね」

「そうね。芸術家とかね。それから例えば大切な仕事だけど、リーダー。これは、遺伝子でいじれるとしたらせいぜい外面や声とかになるのかしらね。むしろ経験とか育ってきた人格が占める部分が大きいわね。もし自分は遺伝子調整によつて生まれながらにリーダーとしての資質が与えられている、なんて言う人がいたら木で鼻をくくつてやるわ」

「そうですよね！」

「……ごめんなさい、ちょっとお手洗いに رفتてくるわね」

どうしたんだろう。なんか吐いているようだ。激戦続いて疲れているのかな？ 心配だ。

With a will

そのままお茶なんか出してもらっちゃって、みんなで議長の演説とかデステイニープランについて話していたら、ヴィーノが駆け込んできた！

「ハアハア……アルザツヘルが撃たれた！」

「え？」

「連合のあのレクイエムで！」

「ええ！」

レクイエムと言うのはダイダロス基地に設置されていたあの大型ビーム砲の名前だ。そんな名前を付けて、悦に入っていたのだろう。ロード・ジブリールは。

「何で！？ 誰が！？」

「基地に反攻の動きがあったんだ。それをローラン隊が討ったということだ」

「レイ！」

レイも部屋に入ってきた。

「反攻？」

「軍はあれを直したの？」

「言った通りだろ？ シン。例え良いことでもスムーズにはいかない」

オーブ宇宙軍がデステイニープランの強制への反対と大規模破壊兵器の排除を宣言して、レクイエムのステーション1目指して進軍を

開始したと報告があったのはそれからしばらくしてだった。

「まったく何を考えているのかしらね！ オーブは！ 連合との同盟を破棄したと思っただらこれだ。デステイニープランは結果を強制する物でもないでしょう？」

「そう言っつな。奴等も怖いのださ」

「怖い？」

「そうさ。こちらはレクイエムを握っている。強制されると考えても不思議じゃない。俺たちだって艦長から話を聞いてるだけで議長の本意なんざわからんさ」

「そうしたって、奴等だって不法に戦略級モビルスーツのフリーダムとかエターナルとか隠しておいて、いまさらという感じよねー」

「そうよね、ゲイル。ユニウス条約の明白な違反よ。これほどの宇宙戦力保持しておきながら、強すぎる力は争いを呼ぶ？ 笑っっちゃうわね。に、してももどかしいわね。議長も、もっとうまくやれなかったのかな。反ロゴスで世界を纏めた手腕は見事だったけど」

「言っつな。いまさら言っつても後知恵になるだけだ。議長が可哀想だろ」

「そうだね。……アスランとシン、またオーブ軍と戦わせちゃうな

……」

「……覚悟はある！ 俺は戦っつ！」

「……アスラン！」

振り向くと、アスランがいた。

「心配するな。いまさらだぞ」

「だよな。さすがアスランだ。見込まれて再びフェイスになっただけある」

「ちゃかすなよ、ショーン。シンには、フリーダムの相手をしてもらっつつもりだ」

「そっか。オーブ兵の家族の恨みはあたし達が引き受ければいいものね。シン、勝てるかな？」

「勝てる！ そのために猛特訓してきたんだ」

「もし、相手がコクピットを狙ってきたらどうすんの？」

「その想定でのシミュレーションもみっちりしてるよ、ゲイル。大丈夫だ！ あいつなら」

ミネルバは、ステーション1の防衛を命じられた。

やってくるオーブ軍の中には、あのエターナルも確認されたと言う。フリーダムはきつと現れる……

「でも、オーブ全軍はダイダロス基地に向かっちゃって、ステーション1に来るのはアークエンジェルとエターナルだけえ！？」

「オーブ本土じゃ反政府デモや、軍のサボタージュもあると聞く。オーブも苦しい所だろう」

「みんな、2艦だけだと侮るな！ エターナルにはミーティアと言う戦艦並みの武装もある。自分で言うのもなんだが、前大戦時、俺とキラ・ヤマトで、プラントに飛来する無数の核ミサイルをすべて迎撃したり、押し寄せるモビルスーツをばったばったと戦闘不能にしたり、まあ強力な武装だ。これは、2艦がステーション1を早期に落とし、続いてダイダロス基地に向かう作戦だろう」

「そうだな、気を引き締めよう。……まだミネルバがステーション1に着くにはしばらくある。しっかり休んでしっかり働こうぜ」

……

「ルナ、ちよつといいか？」

「なあに、レイ。ひよつとして、愛の告白！？」

「莫迦。真面目な話だ。聞いてくれ」

「……いいわよ」

「ふ。俺にはもうあまり未来がない。実は、俺はクローンなんだ……生まれながらにしてテロメアが短い」

「……」
「おそらく俺は、議長が作る新しい世界を見届ける事は出来ないだろう」

「……」
「議長はお前を信頼している。だからルナ、お前が守るんだ。議長と、その新しい世界を……って、聞いているのか？」

「ええ」

「だったら黙ってないで少しは反応しろ」

「そうね……じゃあ一つ聞くけど」

「ああ」

「レイ、あなた、何時死ぬの」

「な、何?!」

「寿命が短いんでしょう。何時死ぬのかと聞いているの」
「……」

「明日か、明後日か。はっきりさせて貰えると助かるんだけど……分らないの？」

「当たり前だ！」

「意外と不便ね。それに、寿命が短いなんて言っている割には、しぶといわ」

「そんなに簡単に死んで堪るか!!」

「……そう。じゃあ、あなたの頼みも却下ね」

「何だと？」

「あなたのオリジナルが何歳の時のクローンか知らないけど、人類の理論上の最大寿命は120歳よ。もっと延びるかも？ それだけ元気なら、まだまだ長生き出来るわよ。せいぜい長生きして議長の為に励みなさいよ」

「……ルナ、お前」

「さあ、そろそろ出撃の準備よ。奴らは、簡単な相手じゃないわ。」

入念に行きましょう」

「ああ、そうだな……ルナ」

「何？」

「勝つぞ。俺たちは死ぬ訳にはいかないからな」

「いつもの事よ。レイ、気負わないでね。冷静にね。くれぐれも」

「……それは余計なお世話だ」

……

「少しは休めたか？ルナ。そろそろ俺たちも出撃だぞ」

「ええ」

「ミネルバにはフェイスが4人もいるんだ。ステーション1、守つて見せなきゃな。……ルナ、議長についてどう思う？」

「……アスラン？ 何を突然……」

「君から見た意見を聞きたいだけさ。ああ、今更ラクス達が正しいとか言うつもりはないから安心してくれよ」

「……そうですね。正直な所、全面的には賛同できないというのが私の意見です」

「ふむ」

「デステイニープランはナチュラルとコーディネイターの確執を取り除くためならば、そう悪いものではないと思います。ナチュラルとコーディネイターが争わないのならそれにこした事はない。けれど……」

「けれど？」

「やり方が少々強引すぎるように見えます。現にデステイニープランは議長の”提案”ではなく一方的な”導入”宣言により始まりました。対話も議論も何も無い」

「……」

「デステイニープランは、評議会で議論したものでなく議長一人が考え上げて宣言しました。本来なら、評議会でどうやって実施す

るか、実施にあたっての問題点などを議論するはずです。しかし、それすらもなされていない。問題はそこです」

「そこ？」

「まるで議長個人の考えあげたプランが正しいかのようになっている。絶対的に正しい人間などいないのに、民衆は自分達で考えるのをやめて、偉い人間の言いなりです。まるで人形ですね」

「ふむふむ」

「デステイニープランを全面的に否定はしませんが、よくもわかっていないプランを両手を上げて賛同するつもりもないですよ」

「……そこまで考えていても、君は議長の言うとおりに働くのか？」
「今は戦争中ですから。自国の政策云々以前に倒さなければならぬ敵がいる……議長に文句を言うのはその後ですね。政治家でもない、ただの軍人の私が問題を指摘しても取り合ってもらえないでしょうが」

「ヘタをすれば反逆者として捕まるかもねしれんぞ」

「その時はその時です。なんなら全世界にTV中継されてる時にもやってみますか。派手なほど大衆へのインパクトは大きいですし、お前らも少しは自分で考えろ」ってね」

「君らしくなく過激だなあ」

「今まで散々”軍の命令だから”と多くの命を奪ってきたんです。一度くらい馬鹿げた事をやってみても悪くないかと」

「どうして俺にそこまで話してくれたんだい？議長に君の事を報告するかもしれないよ？」

「私にもよくわかりません。ただ、アスランになら話してもいいかと思いました」

「信頼されてるってことかな？」

「ふふ。さあ、どうでしょうね」

『コンディションレッド発令、コンディションレッド発令。パイロットは速やかにモビルスーツに搭乗してください』

「出撃みたいだ、行こうか。……なあ、ルナ」

「はい？」

「もし君が今言った事を実行するなら、俺も手伝っていいかな？」

「ふふ、お好きにどうぞ」

「ああ、好きにするよ」

『デステイニー、レジェンド、発進してください』

いよいよだ！

「アスラン・ザラ、レジェンド、発進する！」

「ルナマリア・ホーク、デステイニー、行くわよ！」

あしたは消えない

ステーション1にはアークエンジェルとエターナルの2艦しか来なかった。だけど、アスランの言ったとおり、エターナルから発進したミーティアにより防衛隊は多大な被害を蒙っていた。

発進したそこでは、すでにフリーダムとインパルスが戦っていた。

「アスラン！ こいつ、キラ・ヤマトじゃない！ 戦い方がまるで違う！ 強い！」

「落ち着けシン！ そうだとしても、俺たちがやって来た特訓は無駄じゃないだろう！」

「フリーダム！ 覚悟！」

あたしは左腕のビームシールドを構えて突っ込む！

！ 衝撃が走る！ フリーダムは左腕のビームシールド発生装置にアーマーシュナイダーを突き立てていた。どうやって？ そうか！ アロンダイトの様に対ビームコーティングされてるんだ！ とっさにこんな事するなんて！

「くっ！」

右腕のスレイヤーウィップを振るう！ あっさりフリーダムにかわされる。強い！ 確かにキラ・ヤマトとは違う！

「ルナ！」

レジェンドとカオスがフリーダムにオールレンジ攻撃を仕掛ける！

あたしはアロンドイトを構えると急加速で突進！ フリーダムのビームサーベルと切り結ぶ！

インパルスもエクスカリバーを構え突っ込んでくる！ その隙に！

「狙いはこつちよ！」

アロンドイトから左手を離し、左腕のスレイヤーウィップを振るいフリーダムの右手に巻き付かせる！ 再びアロンドイトを手にして加速！ こちらの機体を押し付けながらスレイヤーウィップでフリーダムの右手を引き付け！ 右腕を切り飛ばす！

「シン！ レイ！ フリーダムは任せていいか！ こっちはミーティアを叩く！」

「了解。任せろ、もう慣れてきた」

冷静な声でシンは言う。任せていいかな。

あたしとアスランはミーティアへ向かう！

『こちらはエターナル。ラクス・クラインです。中継ステーションを護衛するザフト軍兵士に通告いたします。わたくし達はこれより、その無用な大量破壊兵器の排除を開始します。それは人が守らねばならないものでも、戦うのために必要なものでもありません。平和のためにとその軍服を纏った誇りがまだその身にあるのなら、道を空けなさい！』

「何を！ そっちこそ良くぞ今まで、平和を誓ったはずのユニウス条約破りの大量破壊兵器を隠し持っていたものね！」

『それは、このような事態に備えるためです。想いだけでも、力だけでもだめなのです。アスラン、ルナマリアさん、あなた方もフェイスならご自分の胸で考えてください。今のデュランダル議長の方針が正しいのかを』

「つまり、他人の武器は汚い武器、ご自分の大量破壊兵器はきれいな破壊兵器って訳ね。毎度毎度ご自分だけきれいに糊塗して。反吐が出るわ！」

あたしたちの前に見知らぬ黒い重厚なモズルスーツが三機、道を塞ぐ。

あたしはビーム速射砲で、アスランは突撃ビーム機動砲で攻撃する！

あれは！

「アスラン！ あれはビームシールドです！」

「ああ、あれは確かMSコンペティションでザクに負けた機体だ！改造を加えたのか？」

相手は一列になってあたしに向かってくる！

相手のバズーカの弾がシールドで弾ける！

「邪魔を、するなー！」

両腕を振る！ スレイヤーウィップ！

右手のはビームシールドで防がれたけど、左手のスレイヤーウィップは見事に、先頭の相手のビームサーベルをぶち切る！

アスランはオールレンジ攻撃でビームシールドの無い後ろ側から一機撃破していた。

「ハイネ！ 後任せていいか？」

「OK！ 任せなさいって！ ゲイル、ショーン、散開して行くぞ！」

「あいよ！」

「おう！」

とうとうアスランとあたしだけになったけど、負けられない！

相手はミーティアを切り離す！

……あれは……フリーダム？のような？ 何か違う？ ! この攻撃！

「気をつける！ ルナ！ おそらくフリーダムの新型だ！ レジェンドと同じドラグーン攻撃だ！」

「はい！」

「ドラグーンはレジェンドのドラグーンで抑える。行け！」

「はい！」

あたしはビームシールドを構えて突っ込む！ 新フリーダムもビームシールドを構える！

「く、アスラン！ 君だろう！ なぜこんな事を！」

「やはりキラか！ 俺の声は届かなかったようだな。もうお前は、敵でしかない！ 投降しろキラ！」

速射砲のビームとフリーダムのビームシールドがぶつかり合う！

「やめる！ アスラン！ 俺たちはお前のために、この機体を用意してまで待っていたんだぞ！」

「バルトフェルドさん……！ なぜ止めなかったんです！ キラを！ ラクスを！ こんな事を！」

あれは……ジャステイス？に似た機体 新型？
その後から！ カオスにインパルス！

「シン！ レイ！」

「ルナ！ ジャステイスは任せる！ アスランとルナはフリーダムの新型を！」

「フリーダムは殺ったの？」

「ああ、シンががばつちりとな。 見違えるような動きだった」「了解！」

アスランが新フリーダムのドラグーンを止めているうちに！

！ 新フリーダムの胸部が光る！ とっさにビームシールドを広げると光の奔流がデステイニーを包み込む！

あたしも左肩のビーム速射砲を放つ！ フラッシュエッジ2ビームブーメランを投げつける！ 新フリーダムは左腕のビームシールドを張る。

「それを狙っていたのよ！」

あたしはアロンドイトを抜き放つ！ ビームコーティングされたアロンドイトはビームシールドを貫き！ ビームシールド越しに新フリーダムの左腕を切り飛ばす！

「 だけど！ ここで僕たちが負けたら、世界は！」

「 良くなる！ より良き世界にしてみせる！」

「 さよならだ……キラ！」

「 ぐううう！」

アスランは着実に新フリーダムのドラグーンを一基ずつ仕留め、とうとうレジェンドのドラグーンが新フリーダムへの攻撃に参加してきた！

「止まった！ 今だルナ！」

「貰った！」

新フリーダムは右腕のビームシールドを張る。それじゃあ、さっきの繰り返しよ！

あたしがアロンドイトで切り裂こうとすると、とっさに新フリーダムはビームサーベルで受け止めた！

相手の勢いそのまま新フリーダムの胴体を引き付け！ 左掌をコクピットに押し付けパルマファイオキーナを放った！

後は エターナル！

「やめろ！ エターナルはザフトの艦だ！」

いきなりドラウプニルを撃って割って入ったグフがいた！ 誰！？ あたしはそのグフに向き直る。

「その声はイザークか！？ 血迷ったか！？」

ええ！？ あの名高いエースのイザーク・ジュール！？

「ルナ！ かまうな！ エターナルに行け！」

「了解！」

「アスラン、貴様あわかつているのか！ エターナルにはラクス・クラインが乗っているんだぞ！」

「わかっているさ！ 彼女がもう戻れないところに行ってしまった事も！」

次の瞬間、アスランのオールレンジ攻撃でイザーク・ジュールのグフは四肢をもがれた。

あたしはそれを後ろ目にエターナルの艦橋のラクス・クラインに相

対する。

「エターナル！　これが最後よ！　降伏しなさい！」

「……キラ、キラが……ルナマリアさん、まだわからないのですか！？　デュランダル議長に従う事は、このままでは世界は終わりです！」

「……さよなら」

あたしはアロンドイトを艦橋に突き刺した。

「仇は取ったわ、父さん……」

次にアークエンジェルに向かおうとした時、全周波数で通信が入った。

『こちらはプラントのデュランダル評議会議長だ。オーブ宇宙軍、そしてザフト全軍に告ぐ。オーブ本国よりオーブ首長国連合代表代行のユウナ・ロマ・セイランより和平の申し出があった。戦うのをやめよ。和平こそが私の意志である』

その声が一分遅れていたとすれば、アスランの知人はさらに多数、この世から姿を消していただろう。ダイダロス基地を攻めたオーブ宇宙軍等は、エターナル、アークエンジェルの助勢はとうとう来ず、戦力差のまま、壊滅への道を辿っていたのだから。アークエンジェルの艦橋にはシヨーンとゲイルが、テンペストを突きつけていたのだから。そしてアンドリユー・バルトフェルドは、コクピットで、動くこともできずに、血の臭気に包まれながら、スピーカーから流れ出る声を聴いたのだと言う。

『……戦うのをやめよ！　和平こそが私の意志である』

最終話 しあわせのありがた

「気をしっかり！ バルトフェルドさん！」

アスランが、ミネルバに収容されたジャステイスからバルトフェルドさんを担ぎ出している。

これが名高いアンドリユー・バルトフェルドか。
あたしも手を貸す。

「う……」

「痛いですか？ すみません。ストレッチャー早く！」

「……それよりも、教えてくれ。エターナルはどうなった？ アークエンジェルは……」

「アークエンジェルは無事です。エターナルは……艦橋以外は無事です」

「……そうか……ラクス！」

彼は気を失ったようだった。そのままストレッチャーに運ばれていた。

……

「それにしても、ユウナ・ロマ・セイランが生きていたとはねえ。あたし驚いちゃった」

「ああ、なんでも、黒海遠征で率いていた部隊を中核にして国防本部を制圧、カガリ・ユラ・アス八代表首長を捕縛したと言う話だ。スカンジナビア王国でも共和派のフォン・マンネルヘイム元帥がクーデターを起こして、話し合いを求めてきたらしい」

「私、嬉しいな。彼が生きててくれて」

「俺もだ」

「いい男っぱかったものねえ。凜としててさ」

「アスラン……またあの時みたいに閉じこもっちゃった」

「昔仲間だった人を、亡くしたんだものね」

「心配するなよ、ルナ。アスランはまたあの時のように立ち直るさ」

「そう、そうよね！」

戦いは終わった。

その後、プラントのデュランダル議長、オーブ宰相のウナト・エマ・セイラン、スカンジナビア共和国のフォン・マンネルヘイム大統領、そして大西洋連邦のジョゼフ・コーブランド大統領を中心として世界各国の首脳と会談が持たれ、しばらく後に新国際連合の発足が宣言される事となる。

エターナル乗員の生き残り、そしてラクス・クラインに同調していた傭兵やジャンク屋ギルド員はプラントによって裁かれる事を免れた。

宰相に返り咲いたウナト・エマ・セイランがしたたかな交渉力で彼らをオーブ国民、軍人であったとして認めさせたのだ。しかし、その代わり、ジャンク屋ギルドは解体、彼らの黒幕と目されたマルキオ導師は終生軟禁状態に置かれる事となった。

「そう言えば、フリーダムに乗っていたのは、世界的にも有名なサイレントテイルって傭兵部隊のリースだったんだって」

「なんだよ、いきなり」

「ふふ。シンもよくやったって事よ。おめでとう！」

「あ、ありがとう！」

シンとレイ、そしてアスランとハイネは、ネビュラ勲章を受章したのだ。

あたしも三個目を受賞した。そしてそのついでと言う訳でもないだろうけど、再編されるミネルバのモビルスーツ隊の隊長になる。

ミネルバがその傷を癒し、月軌道に配置されると言う時、タリア艦長がいきなり艦を降りる事が知らされた。

「なんでですか？ いきなり。私、艦長の下でモビルスーツ隊の隊長やるの楽しみにしてたのに」

「しょうがないでしょ。できちゃったんだから」

「できちゃったって？ えー？ 赤ちゃん!？」

「ルナマリア、声大きい」

「あ、すみません」

「それにしても、不思議なものねえ。ふふ。あ、結婚式には呼ぶから出て頂戴」

「え、誰、そう言えば誰とのお子さんなんですか？」

「……ギルバート・デュランダル」

「えー!？ 議長!？ あー、やっぱり」

「やっぱり？ ばれてたのね。やっぱり艦内じゃまずかったかしらね」

「えー!？ 艦内ですって……」

「あら、やぶ蛇だったかしら。でも計算するとちょうどその頃なのよね」

「あは。とにかく、おめでとうございます!」

「ありがとう。あなたの恋もうまくいくといいわね」

しばらく経って、プラントでアスランにあった時、議長とタリアさんの結婚式の話になり、ふと彼はつぶやいた。

「そつえばさ、マリユーさん アークエンジェルの元艦長と、バルトフェルドさんが結婚したって知らせてきたよ」

「そう、バルトフェルドさんが……」

アスランは涙ぐんでいた。

「嬉しいよな。昔の仲間が生きててくれて、幸せになってくれて……」

デステイニープランは、結局あたしが心配するまでも無く、評議会、および各国で慎重に協議された上で、導入された。

とりあえず雇用の保障による治安の改善、そしてブレイク・ザ・ワールドからの効率的な復興には役立つているようだ。プラントにもハーフコーディネイターやナチュラルの大規模な移民が募られ、プラントにコーディネイターと言う図式は崩れ始めている。コーディネイターはナチュラルに還るのだ。

口の悪い人は、議長がタリア艦長との間に子供がすんなり授かった事で、遺伝子学者として評価を落としたからデステイニープランで強く出れなくなったのだと言う。それでもいい。議長とタリアさんは、レイ、それに回復したエクステンデットの少年少女も引き取り、にぎやかで十分幸せそうだ。

「シンは？ シンは来ないの？」

あたしが議長の　そしてレイの家に行った時、金髪の女の子ステラがいきなり玄関に走ってきた。

回復したエクステンデットの少女だ。今はこの家の養子となって、学校に行っている。踊りが好きな子だ。

「シンは任務中だ。来月は来るさ」

「なあんだ」

「レイ！ 元気そうね」

「ああ、おかげさまでな」

戦争終結から一年後、今、シンはミネルバ級二番艦「ウラニア」のモビルスーツ隊長に任命され、今はミネルバと入れ違いに月軌道艦隊で任務に付いている。

レイは本国防衛艦隊でやっぱりモビルスーツ隊をひとつ任されている。

「ステラは相変わらずシン、シンね。シン、よく来るの？」

「ああ、ルナマリア以上には来てるな」

「ふふ、ステラが目当てかな？」

「そうかもな。最近じゃ二人で出かけたりもしてるみたいだぞ」

「ふふ、そっかー。最初にシン、この家でステラに会った時から気になってたみたいだね」

「そっちはどうだ？ アスランとは」

アスランはアスラン隊長になり、あたしがいるミネルバも含めて艦隊を率い、シン達の艦隊と交代で月軌道防衛の任に付いている。当然、旗艦のミネルバに座乗している。

「もちろん順調よ」

「そうか。よかったな」

「ありがと。レイは浮いた話とかないのー？」

「こいつ、ミア・キャンベルって言うシンガーソングライターと付き合ってるぜ」

「あ、アウル！ お久しぶり！ 今の本当？ ミア・キャンベルって、大手のミュージックレインボーってレーベルがプッシュしてる歌手よね？」

「ああ。こいつがミア・キャンベルと街歩いてるところ、見ちま

った」

「……まあ、そんなところだ。シヨーンと逢ってる時に紹介されて、意気投合してな」

「やるじゃない！ レイ！」

アウル 回復したもう一人のエクステンデット、彼もやはりこの家の養子になっている。彼にははっきりした夢がある。今まで殺す事ばかり教えられてきたからこれからは生かす事 医者になりたい、と言っている。

シヨーン。彼はザフトを辞めた。何をするかと思ったら、次に会った時はアクション俳優になっていた。今年、彼が主演の映画が公開される。前評判は上々だ。

ザフトを辞めたと言えばゲイルもそうだ。航空輸送会社を興すと共に作家としても活躍している。最近彼女の書いた『ザ・スペシャリスト あるMSパイロットの告白』と言う本が出版された。

「あー」

とことこと、幼い女の子が歩いてくる。

「きゃー！ ダイアナちゃん！ 歩けるようになったのね！」

「ああ、最近かな？ 言葉はまだしゃべらないが。子供はいいな。未来の塊だ」

「可愛い盛りでしょう」

「ああ、妹と言うものは可愛いものだ。さあ、入り口で話していてもしょうがない。上がってくれ」

「そうね。おじやましませーす」

オーブでは、一旦は代表首長に就任したユウナ・ロマ・セイランだが、奇怪な事に戦争から一年ほど経った頃、国民の統一の象徴として、カガリ・ユラ・アスハを代表首長に返り咲かせた。さらに一年後、二人は結婚した。あたしがその時結婚式に参列する議長の護衛としてオーブを訪れた時には、とても仲睦まじそうな二人に見えた。結婚式の前日、泊まっている部屋をノックされた。

「どうぞ」

アスランが鍵を開ける。

「え！？ カ、カガリ！？」

え？ そこには、シャツにズボンといった目立たない服装で、カガリ・ユラ・アスハが立っていた。

「早く中に入れてくれ！ 見つかる！」

「あ、ああ」

アスランは手早く彼女を中に入れると鍵をかけた

「……一度、直接会って、話したかった」

「私、席外そうか」

「いや、ルナマリア・ホークと言うそうだな。あなたもいてくれ」
「……はい」

「アスラン。約束を破ってすまない」

彼女は深く頭を下げ、封筒を差し出した。

「だから、これを返さなくちゃと思って」

「これは、オーブの、あの時の？」

「そうだ」

「……カガリ、ひとつ聞いておきたい」

「なんだ」

「本当に、ユウナ・ロマ・セイランが好きで結婚するのか？」

「……ああ。あいつは、国外追放されても足りないくらいの私を見捨てずにいてくれた。そして教えてくれた。上に立つものの責任、義務。私はディオキアでお前に言われて、わかったつもりで全然わかってなかった。今は、ユウナと二人で、これからのオーブを作って行きたい」

「そうか。彼とは戦ってしまったが、案外いい奴みただったと感じたよ。それに、父親に似てきたかになって来ている。うちの議長も苦勞している。オーブは安心だろう」

「そうか」

「おめでとう。カガリ。心から祝福するよ」

「……ありがとう。じゃあ、マーナが心配するから帰るな」

「ああ」

「ルナマリアさん」

「あ、はい」

「こいつを頼むな。こいつは時々優柔不断で情けなくて、でも、とつてもいい奴なんだ」

「……はい！」

あれから一年後

アスランと言えば、今、あたしの左手に指輪を着けている。照れくさそうにする彼の瞳。あたしたちは皆の祝福の中、誓いのキスをした

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8526o/>

赤き月の鷹【完結】ガンダムSEED DESTINY再構成

2011年2月15日17時45分発行